

42612

教科書文庫

4
810
51-1930
20000 79807

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

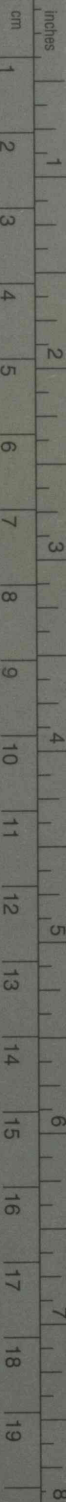


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



5a
810
昭5

歴代文学讀本 再訂版 卷一

教科
51
200



資料室

日四十月二年五和昭

科語國校學範師

濟定檢省部文

教科書文庫

4

810

51-1930

2000079807

52
810
BB5

東京高等師範學校附屬中學校内
國語漢文研究会編纂

再訂版

歷代文學讀本

東京 目黒書店發兌

広島大学図書

2000079807





太田道灌



歴代文學讀本 卷一

目次

一	雲萍雜志	一
一	かんにん	一
二	村長の茶の湯	二
三	堪忍づよき人	六
四	長たる人	七
五	名和が約束の松	八
六	善心坊と法心坊	一〇
二	窓のすさみ	一三

一	忠僕市兵衛	三
二	腹中の猫	六
三	僧無南	二
三	落語	三
一	急病	三
二	立合	三
三	貧乏人	三
四	下女の脈	三
四	近世和歌	七
五	東西遊記	三
一	藤樹先生	三
二	羽州の鬼	四

三	飯野の風穴	四
四	孝行	四
六	いろは文庫	六
	玄藏の古徳利	六
七	<small>東海 道中</small> 膝栗毛	七
	座頭の川わたり	七
八	眞書太閤記	七
一	木下藤吉郎信長に仕ふ	六
二	藤吉郎の出精	八
三	桶狭間の戦	九
九	狂歌	一〇
一〇	常山紀談	一四

目次終

- 一 太田持資歌道に志す事……………一〇四
- 二 鳥居強右衛門忠節の事……………一〇六
- 三 豊臣關白五腰の刀の主を祭せられし事……………一〇九
- 四 曾呂利新左衛門屢頓智の事……………一一二
- 五 石田三成生捕らるゝ事……………一二五
- 六 小早川隆景遺訓の事……………一二八
- 七 東照宮諫言を容れ給ひし事……………一三〇
- 八 福島正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事……………一三三
- 九 塚原卜傳劍術鍛錬の事……………一三五
- 一〇 小櫃與五右衛門會津神公を諷諫せし事……………一三七

歴代文學讀本 卷一

一 雲萍雜志

四卷。柳澤里恭の著、其の平生の見聞を録したる隨筆集にして、多くは勸善懲惡の說話なり。天保十四年刊行す。
 柳澤里恭は淇園と號す。大和國郡山藩の老臣にして、才文武を兼ね、又繪畫を善くせり。寶曆八年九月歿す。年五十三。

一 かにん

或人文盲なるものを異見して、世の交は、他の事はいらざ、たゞ堪忍の二字をよく守るべし。といへば、文盲の人は頭を傾け、かにんと

は四字にて侍らずや」と指をもて數へ、御許には、おぼしたがりなるべし。かんにんと四字にて侍り」といへば、異見せし人いふ、愚かなる人かな。堪忍とは、たへしのぶと訓みて、二字なり」といへば、又頭を傾け、たへしのぶならば、又一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰せらるとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり」といへるに、その人またいふ、汝が如き愚かなる文盲は實に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。おのれがまゝにすべし」と、大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰せらるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり」とて、笑ひ居たりきとぞ。

二 村長の茶の湯

江戸葛飾
東京府南葛飾
郡。

江戸葛飾のほとりに、權兵衛といへる村長あり。ある年の春、伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人とともに、御師何某が家に宿れるに、山海の珍味を盡くして馳走ありてのち、おのゝくに薄茶まゐらせんとて、案内して茶室へ招き請じければ、かの村長をはじめとして十三人席に着けは、御師は丁寧にあいさつして、心を配り茶を點てて、權兵衛が前に出し置きけれども、農夫の身なれば、茶道の心得はいさゝかもなければ、大いに心をくるしめ、いかにして飲むべきか、人の話にも、茶を飲みたる上にて順にまはすなど、聞きしが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲みかけまはしたりとも足るべからず、又ひとりして飲み、他の者に鼻あかさんこと如何なれども、われ村長の身として、今更聞きて飲まんも口惜しきことなりと、さまざまに思ひめぐらすうちに、御師は先に出しし口取菓子

予
本書の作者柳
澤洪園。

村長が前へ差出し、「いざ召させ給へ」と強ひければ、はつと茶を取上げて残らず飲み、前に置きければ、御師は取りて茶碗をすゝぎ、又點てて村長が前に出しつゝ、「いざ菓子を取り給へ」といふに、この度は菓子をとりて食ひ、又茶を残らず飲みて前に置きければ、御師又取りてもとの如く點てて、村長が前に出す。村長いひけるは、「我等は、もはや澤山くだされたり」といふに、さあらば、次の方へ御送りあるべし」とて、この順にしておのゝく一碗づゝ飲み、辭退して座敷に入りて、おのゝくひそかにその心勞を物語りつゝ、臥し、又も茶の饗應あらばいかばかり迷惑すべきはやく暇乞して歸國するには如何かとて、明くるを待ちて發足せり。

教へ給はるべし」とて、しかゝの事を物語り、今に忘れがたく、恥づかしく、口惜しくおぼえきといふ。予大いに笑ひて、その許は日ごろに似げなき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて、農業の事にさへくはしければ、恥づかしき事なかるべし。その許もし茶を學びて、一村皆これにならひて農事に怠りなば、田畠はことごとく不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に、耕作收藏時に違はげ。國中百人耕して、五十の遊民あらば、その國必ず飢ゑぬべし。百人耕して十人遊ばば、その國果して豊なり」といへば、權兵衛感じて、茶の湯を習はん心をとめてたり。

三 堪忍づよき人

予が友としける平澤何某といふ士は、堪忍づよき人にして、ある時

主用ありて、人多く具して行きける道のほどにて、二階より齒みがきをつかひて吐きたる唾の、あやまちて平澤が着たる上下へしたかにかゝりたれば、供人大いにいきどほり、その家に入り、唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤とゞめて、しばしこの家をかへしとて、その家に入りて、挾箱より着がへの上下を取出して着かへけるに、その家のものども大勢出でてわびけるにぞ、平澤申しけるは、あやまちなるべし。重ねて心をつくべし。とて、出行きぬ。供人いひけるは、いかでそのまゝにゆるし置き給へるぞ。といへば、けふは大切なる主用なり。かゝるさゝいのこと隙取るべきことにあらず。わが常に守れる堪忍はこの事なり。といへり。その後、また私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏のころ、溝のけがれ水を打ちけるが、平澤が袴のすそより下をけがせ

り。またく、供人大いにいきどほり、すでに打擲にも及ばんとせしを、おしとゞめて行きければ、供人申しけるは、いふかひなきことにて候。といふに、さにはあらず。けふは私用にて出でたり。私に人を罵ること、士たる者の本意に違へり。たゞ堪忍だにせば、世に恥辱といふことあるべからず。と云はれきとぞ。

四 長たる人

紀州に豪富なる農家あり。田植の日、早乙女およそ二百五十人あまりも出づるに、その日の朝、田植はじまる頃、近き山中にて、大なる鷲の犬と争ひけるが、遂に犬をつかみて虚空へ飛上りたるを、他より一人かけ來りて、田植の長にいひけるは、あれを見られよ、鷲の犬をとりて空に舞ひ侍り。といへば、その長、言葉を止めて、さる事い

ふべからず。今は苗の植始なり。衆人この事を知らば、皆大ぞら
を仰ぎ見るべし。さある時は、この苗二百五十束ほどのおこたり
なり。とて、人には語らざりきとなん。何事にて、物の長たる人々、
かゝる心がけはありたきことにこそ。

五 名和が約束の松

名和又太郎
後醍醐天皇の
忠臣。伯耆名
和の人、延元
元年戦歿す。

名和又太郎長年は、その父嚴にして、教訓の届きたる人なり。をさ
な遊のまじはりも、兒らに契約せしことは、正しく守りて忘るゝこ
となかりき。
ある時、牛を引きたる童の、唄うたなどうたひ通りければ、長年はあとお
ひ行きて、童を呼びかけ、いひけるは、我をその牛にのせて、川端まで
行けかし。といふに、童うけがひ答ふるやう、御身をのせて行くべき

が、賃には何をかたまはるべき。といへば、長年わが家をかへりみ、門
に生ひたる松を指さして、いづれの樹なりとも、その方が望に任す
べし。とくくやれ。といふに、童よろこびて、長年を川端までのせ
行きたり。



名その後三とせがほどをへて、
和ひとり男童を伴ひ、長年が
長家に來りて、三とせ以前の約
束を物語りぬ。長年、をさな
心の戯なりしかど、かの童は

これを誠と心得、牛にのせたる賃を乞ふに、いかにいひ解けども肯
ぜず。いかゞせん。といへば、長年が父これを聞くより、さもありぬ
べし。約束をせしにたがひなくば、きらせて遣はすべし。とて、童に

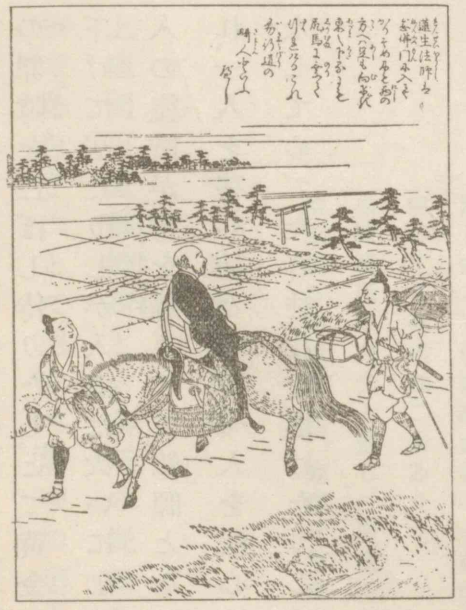
望ませ、門前なる大樹の松を柵せきに命じてきらせ、牛飼にとらせけり。里人はこれを名和が約束の松と呼びて、今にはなし傳へたり。

六 善心坊と法心坊

熊谷次郎、入道して關東へ下向せる折から、たゞ一人近江路より美濃へ越ゆる山中にて、盜賊二人前後を支へて、路銀衣服を渡すべし。とて、刀を抜きつれせまりければ、入道笑ひながら、いと易きことなり。その方等も命をかけて賊をわざとするは、身すぎの爲と思はれたり。路銀衣服共に遣はすべし。さあれど、こゝに尋ぬる事あり、聞きたる上にてともかくもすべし。といふに、賊もその言葉のほげしきに猶豫して、いかなる事を尋ぬるぞ。疾とくいへ、聞かん。といふ。入道申さるゝは、汝等は、たゞ慾のみにて賊をなすか、又身すぎ

熊谷次郎
本名は直實。
始め源頼朝に
仕へて功があ
つたが、後佛
門に入つて蓮
生と稱した。

の成りがたくて賊とはなりしか。この二つの返答を聞かまほし。その上にて、取らすとも取らせずとも、わが心に任せんとあれば賊等は互に顔見合せつゝ、飲食だに自由ならば、いかでか人を害し人の物を奪ふべき。任せぬよりして、命にかへてかゝるわざをもするなり。とい



ふ。善心坊。さあらば、今よりわが、徒弟となりて、世を長閑のどかにくらし、生涯無事に過すの志はなきか。もし二人ともその志あらば、今より直ちに伴ひて法を傳へ、一庵の留守居ともなして得さすべし。よくよく思案して従ふべし。とて、持ちたる路

資を取出し、二人に分ち與ふれば、賊また顔を見合せ、土に手をつきて、さもなし給はらば、今日より志を改め、御弟子となりて、これまでの罪障を亡ぼし侍りたし。とて、黄金をば手にだにふれずして、頭を下げて居たりしが、入道は大いによろこび、懷より剃刀取出して、二人の盜賊が髻を薙ぎすて、法師となして、武藏野なる草庵に伴ひつれ、一人を善心坊と呼び、一人を法心坊と名づけ共に念佛の弘通をなして、めでたき往生を遂げたりとぞ。

二 窓のすさみ

三卷。松崎堯臣の著なり。徳川初代頃より享保時代に至る見聞を雜記したるもの、忠義貞節等の美談多し。享保九年の自序あり。又別に「窓のすさみ追加」二卷あり。

松崎堯臣は白圭と號し、丹波篠山藩士なり。擢でられて老職に列し、政治に頗る功績あり。寶曆三年歿す。年七十二。

一 忠僕市兵衛

上總國市原郡姉崎といふ所の民總兵衛といふ者、人の鐵砲を借持ちて、鳥をうつとて、過ちて隣家の妻女を殺しつ。はじめよりたくみてせしことにあらざればとて、死刑一等をなだめられ、伊豆の島に流されて、田宅は官に没せられぬ。其の子萬五郎とて三歳なり

しを、僕市兵衛といふ者、夫婦心を合せ、ねんごろにいたはり養ふ。主従の禮うや／＼しく、ひたすら昔ありし如くなりけり。

市兵衛家貧しければ、養の遂げがたからんことを憂ひて、一人ある女をも、江戸に伴ひ、人の許に仕へさせけり。又主人總兵衛が罪のゆるされんことを、流罪の年よりはじめて、月毎に江戸に出で、府に訴へてやまず。寛永三年ばかりにや、子供萬五郎の慕ひ悲しみ候のみならず、總兵衛の父なる翁八十に及び候が、生涯の中唯一目見ば直ちに死すとも事足りなんと、且夕歎き申すに、忍び得ず候。願はくは某を流しつかはし、總兵衛を歸し給へ」とわりなく願ひ出てけり。

奉行萩原近江守彼が年月たゆみなく乞ひ來るを憐み、或時間はれしは、汝十年あまり月毎に乞へり。此の事にかゝづらひては、田作

寛永
三代將軍家光
の頃。

りのさはりとならん、いかゞせるにや」とありしかば、江戸に出づる時には、甥に候作十郎と申す者に後の事あづけ置きて、四日が程に歸り候と申す。「さあらば旅宿の費も多からん、そはいかゞしつるぞ」とありしに、某、淺草なる旅籠屋に宿り候。初め打續き宿り候に、何事にやと問ひし、故事の由を語り候へば、あはれがりてその費を取らず、其の上いとも眞實にもてあつかひくれ候と申しけり。

近江守をはじめ、諸司大いに感じ、かゝる者を褒美あらば、おのづから徳化の一ともならんと、其の由を上達しけるに、總兵衛が事は免すべきにあらねば是非もなしとて、姉崎に折から主なき田一町あまりありしに、家一つを添へて市兵衛に賜ひぬ。市兵衛かさねて申しけるは、淺からぬ御惠にて候へども、主の罪のゆるされんことをこそ年月願ひ候に、其の沙汰はなくて、某かゝる御惠にうるほひ

候こと、本意の外に候。同じくは、此の田宅を萬五郎に下し賜はり候へ。と、ひたすらに願ひければ、いよく其の志をめでて、再び上達あり、萬五郎には外の田宅を下し賜ひにけり。(第二)

二 腹中の猫

小野淺之丞といふ者、十七八歳のころ、隣の家より猫の來りて、飼鳥を捕ること度々なりしかば、にくきものかな、射殺してんと思ひ居たる折、向うの築山のかげに猫の戯れ遊ぶを見附けて、あはれそれぞと矢をつがひ、ひそかにねらひよりてこれを射るに、あやまたず當りて、そのまゝたふれぬ。立寄りて見れば、日頃の猫にはあらで外のなり。「あなあさまし、にくしと思へばこそ射たれ、これには罪もなきものを」と、後悔すれどもかひなし。

日暮れしまゝ、一間なる所にありしに、晝間の猫の事心にかゝり、夜も少しふくる頃、臥所に入りたれども、とくも寝られざりしかば、衾をかづき、つくぐと思ひつゞけて居たりしほどに、かすかに猫の啼く聲しければ、不思議や、晝間の猫の啼聲にも似たるかなと思ひ、枕をあげて聞くに、啼くことしきりなり。はては床の下に聲のするやうにて、ふくるにしたがひいよく啼く。いかにしてかゝるぞと、障子の外に出でて聞けば、縁の下になく。おり立ちて追ひたればやみぬ。さてはなかりしかなと思ひつゞ、立入りて臥せば、又枕の下に聲す。かくて夜一夜寝もやらざりしが、明けければ止みぬ。

さても怪しかりけることかなと思へど、人に語るべきにもあらねば、心一つに思ふやう、夜にならば又も聲すべきか、若し生きかへり

たるにもあらんかと、何となく築山のあたりをたづね見床の下の塵はらへとて人を入れて、何事もあらずやと問へば、蜘蛛の網ならではなしと答ふ。とかくして夜になりて臥したるに、なほ前の如くにてありしかば、目も合はずして明かしぬ。

晝ほどになりて起き出でたるに、今日は晝になりても止まず。亭に出でて、親の前にありても、我が居る床の下に聲たえず。暮れかゝる頃よりは、我が腹の中に啼く。とやせんかくやせましと思へば、いよ／＼うちしきり啼く。これよりおのづから病人となりて、物喰ふ事もせざりしかば、日に／＼かたちもおとろへゆき、人心地もなく、一間に閉ぢこもり、腹をおさへて、うづくまりてのみありけり。

こゝに伯父の何某、聞ゆる勇士にて智謀ありしが、來りて言ひける

は、汝不慮の病をうけて、そのまゝならば命終らんこと程あらじ。然れども、少年なりとも士たるものの、獸のたぐひに犯されて病み死なんには、世の聞く所いかゞあらん、まして先祖の名をも汚さんこと口惜しからずや。とても永かるまじき身をもつて、いさぎよくして憤を忘れざる事を世に知らせなば、少しは恥をも雪ぎなん。自らはかり見よかし。とありしかば、淺之丞うちうなづき、仰までもなく、始より口惜しく、いかにもなりなんと存ずれど、親たちの歎き給はんが心苦しくて、今までのび候なり。此の上は、いよ／＼思ひきはめ候。と言ひければ、いしくも心得たり。親たちにもかくと告げ知らせ、明日の夜來りて介錯すべし。思ひのこす事なきやう、よくしたゝめおかれよ。と約してかへりぬ。

その夜になりしかば、宵過ぐる頃伯父來り、湯あみせさせ、衣服を改

め、父母に見えて暇乞はせけり。親の心量り知るべし。子一つばかりになりしかば、いざ時も至りぬ。只今思ひきはめよ。といふに、「心得候ひぬ。御計らひにて恥辱を雪がんこと、いとうれしく候。此の上は、あとの見苦しからぬやうに頼み奉る。」と一禮して、白く清げなる肌をぬぎ、刀を取つて既におし立てんとする時に、伯父の言ふやう、今しばらくらく待てよ。汝今死ぬるは、猫の腹に入りて聲するが爲にわづらはされて、恥づかしさにての事にあらずや。今はの時に、それども聞かずして終らんは詮なし。今一度まさしく聞き定めて、其の聲にしたがひて刀をおし立てよ。とありければ、刀を持ちながら聞くに、聲せず。「いかゞし候やらん、宵までありつるが、聞えず候。」といひければ、それは死に臨みて心おかれて聞えぬなり。心をしづめてよく聞け。とて、さてかさねて問へども、聞え申さず。と、

いふ。「さらば今しばらく待て。そのわかちもなく急がんは、誠に犬死ぞかし。夜ふくるとも、聞定めての事よ。」とて、一夜付き居て、しばらく問ひしかども、終に聲のせぬ由なりければ、「さらばとままれ。」と打笑ひてやみぬ。これより後は、絶えて心にかゝる事もなかりけり。かしこかりける謀計かなと、時の人申しき。(第一)

三 僧無南

無南（鎌倉の禪僧） 僧無南（無南）常に親しく交る商家に行きしに、折ふし其の家掃除して、うち散らしたる頃なれば、一間なる所の残りたるにてうち語らふ所へ、下部の來て、そこより來たるよし言ひて、金一片を紙に包みて出しけり。主人受取りて、さて久しく語りて歸りけり。やゝありて、主人先の金の事を思ひ出でて、いづくに置きたりけん

と思ひめぐらせど、更に思ひつかず衣をふるひて見たれどもなし。あまりの事に、無南の許に往きて「ひる間の金を座に置きしが、もし心得違へて懐中にもせられけるにや、見て給はれ」と言ひしかば、無南聞きて、何の思趣もせず、金一片を取出して與へぬ。

主人これを取りて家に歸り、日を経て、其の間なる鴨居かまどの上の小こ衾ふとに塵のありければ、手づから箒はらにて拂ひしに、紙に包みたる物落ちたり。取りて見れば、先の日下部の持出でし金なり。紙にも其の由を書けり。主人興さめて、無南の許に走り行き、さても卒爾そつじなることを申し候ひて面目を失ひたるよし言ひて、金をかへしたりしに、何の心もなき氣色にて、心得違はれたるならんとはかりにて受取り、つゆも心にかゝりたる様なかりきとぞ。 (追加巻の上)

三 落 語

一 急 病

九つ
夜の十二時。

九つ過の寢入ばな、とんく。誰ぢや。「いや伊勢屋から。御新造様が癪しやが起つて目を取詰めました。急にく」。南無三寶。羽織引つかけていて、ずつとはいれば、家内は上を下へ。醫者殿ねおきのうろたへ眼で、行きなり下女の手を取つて脈を見る。「あゝや、私ではござりません」。はてこんな時に誰彼の差別はないてや。

二 立 合

「なんぼ、やはらの兵法のといやつても、まこと大力に逢うては叶は

ぬ。おれが手にさはるがさいご、兵法でも牛若でも、身動きもさせぬ。との高慢。近所の兵法師の弟子が聞いてゐて腹を立て、師匠の所へ行き、先生、かやうくの事を申します。憎い奴でござる。といへば、へ、千人力を一人で打つてしめるのが兵術、そんな事いふ奴は、ちとしめるがよい。連れてござれ。といふに、弟子ども相撲取を連れて来て、立合せたれば、やがて師匠を一つかみにしてぐつとさし上げ、何とどうだ。今うちつけると微塵になるが、ふたたび口を利くまいか。師匠おちつきはらつて、こゝが術だ。その打ちつけられる時に、あて身の手練、お主が首はころり。さあ遠慮なしに打ちつけろく。相撲取、これはひよんな事したと、打ちつける事もならず、そつとおろすは猶いやなり。せう事なしに、さし上げたまま、で、やれ、人殺々々。

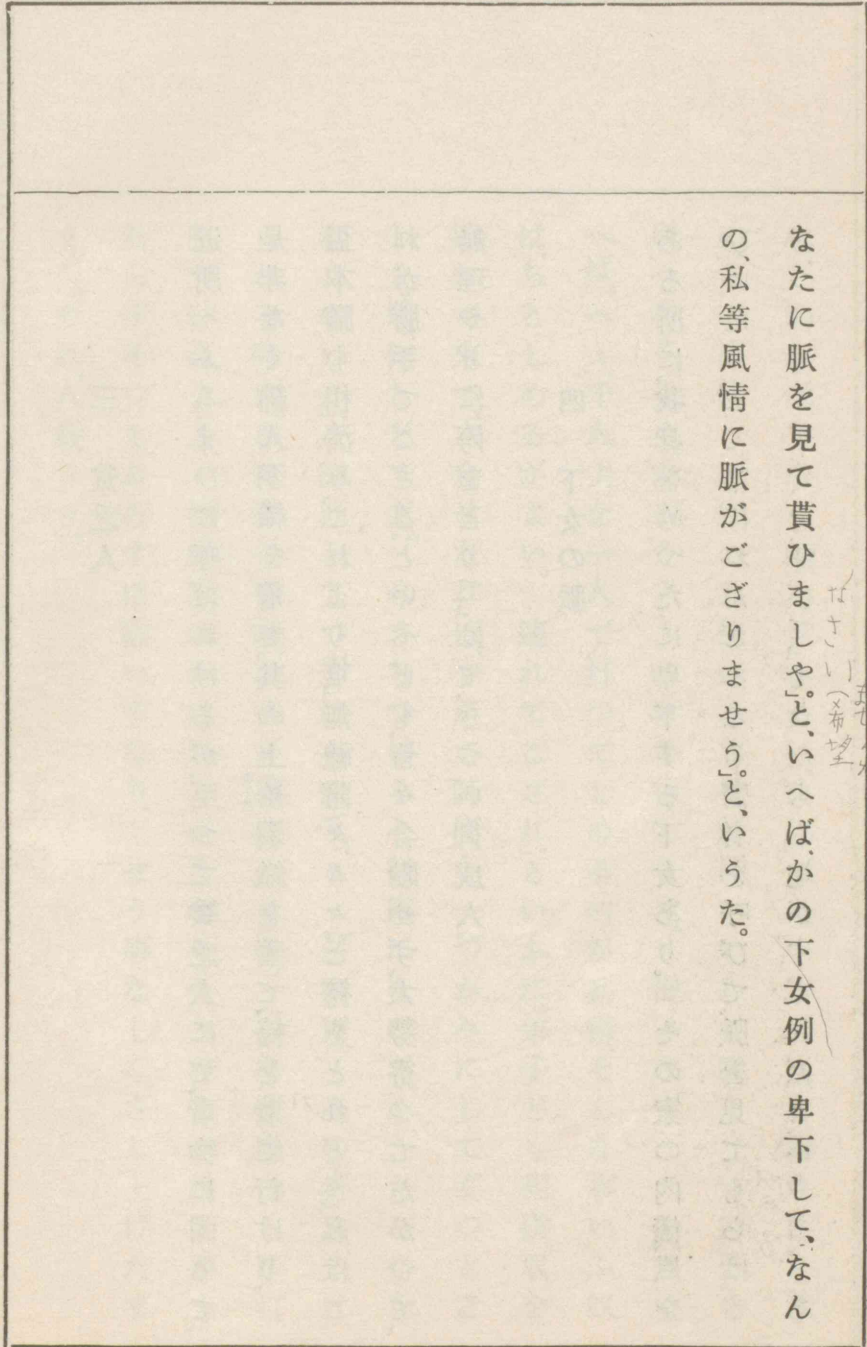
三 貧乏人

近所へふるまひに呼ばれけるが、至つて貧乏人にて、着物に困りて、是非なく綿入羽織を着て、其の上ほろ裕羽織を着て、袴を着て行けり。盃本膳も相濟み、これより皆、無禮講々々々と袴をとれども、私はこれが勝手でござる。といへども、皆々合點せず、大勢寄つてたかつて、無理やりに袴をとりて、はて、きつい御成人。

四 下女の脈

ある所に、我身をめつたに卑下する下女あり。その家の内儀、風をひいたりとして常にねんごろなる醫者いやくを呼びて、脈いやくを見てもらはるるついでに下女を呼びて、そなたも心地がすぐれぬといやる。あ

なたに脈を見て貰ひましやと、いへばかの下女例の卑下して、なんの、私等風情に脈がござりませうと、いうた。



四 近世和歌

僧契沖

國學僧 大阪
高津圓珠庵の
住職。元祿十
四年寂。年六
十二。

賀茂真淵

國學者。遠江
の人。荷田春
滿の門人。明
和六年寂。年
七十三。

比叡

京都の東北に
ある山。
粟津野
琵琶湖畔にあ
る。

夕雲雀芝生におちて聲やめば

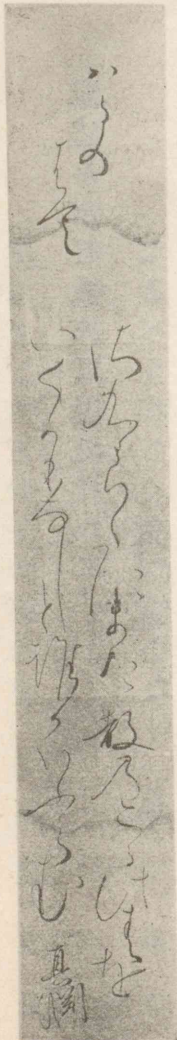
山よりのぼる春の夜の月

大比叡や小比叡の雲のめぐり來て

夕立すなり粟津野の原

僧 契 沖

賀 茂 真 淵



眞淵筆

本居宣長

國學者。伊勢松坂の人。賀茂眞淵の門人。享和元年歿。年七十二。

本居宣長

小澤蘆庵

名は玄仲。歌人。尾張の人。享和元年歿。年七十九。

小澤蘆庵

橘千蔭

江戸の歌人。賀茂眞淵の門人。文化五年歿。年七十四。

橘千蔭

村田春海

國學者。賀茂眞淵の門人。文化八年歿。年六十六。

村田春海

里遠みたどる末野の夕ぐれに

しるべうれしく立つ煙かな

夕されば南の風に雲消えて

みるめすゞしき沖のいさり火

隅田川蓑着てくだす筏士に

かすむあしたの雨をこそ知れ

心あてに見し白雲はふもとにて

思はぬ空にはるゝ富士のね

清水濱臣

江戸の國學者。村田春海の門人。文政七年歿。年四十九。

清水濱臣

香川景樹

桂園と號す。京都歌壇の雄。天保十四年歿。年七十六。

香川景樹

熊谷直好

桂園派の歌人。文久二年歿。年八十。

熊谷直好

木下幸文

桂園派の歌人。文政四年歿。年四十三。

木下幸文

見渡せば根白高萱うら枯れて

秋風寒し利根の川づら

草枕旅を常なる雁すらも

かへる空には音をぞなきける

うちしきる麓の里の鳥が音に

明けこそわたれ三保の松原

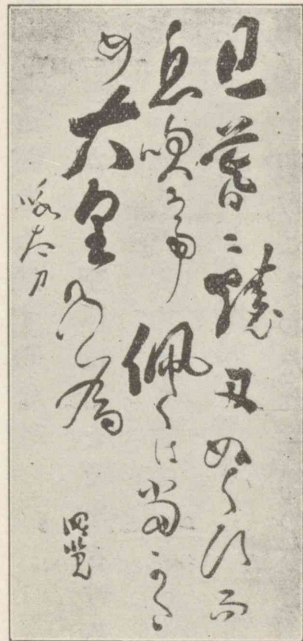
春雨の名残煙れる松原の

奥にきこゆる雉子の聲かな

橋曙覽
歌人。福井の
人。明治元年
歿。年五十七。

橋 曙 覽

すくくと生ひ立つ麥に腹すりて
燕とび來る春の山ばた



曙 覽 筆

中 島 廣 足

中島廣足
熊本藩士。國
學者。元治元
年歿。年七十
三。

井上文雄

井 上 文 雄

風吹かてをりくおつる杉の實の
音もさびしき谷のした水

田安藩侍醫。
國學者。歌人。
明治四年歿。
年七十二。

太田垣蓮月
京都の女歌人
明治十八年歿
年八十五。

太 田 垣 蓮 月

神無月春日おほゆる日あたりの
川ぞひ林こがらなくなり
小山田の霧の中道ふみわけて
人來と見しはかゝしなりけり

五 東西遊記

二十卷。橋南谿の著にして、著者自ら旅行したる國々の奇觀異聞を始め、孝子忠僕の善行、人情風俗の差別、氣候物産の異同等を詳録せり。橋南谿名は春暉、京都の人にして醫を業とせり。文化二年四月歿す。享年未だ詳かならず。

一 藤樹先生

先生は俗稱を中江與右衛門といひ、江州大溝おほなまの在小川村の産にて、分部侯わぶべの領地の百姓なりしが、其の德行、近時の學者のおよぶ所にあらずと思はる。

先年、余聞きしことあり。尾州の一士人用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村にありと聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、畑道な

大溝
琵琶湖西岸の
都邑。

れば知れ申すまじ。案内して奉らん。とて、先に立ちて行く。程なく、小き藁屋に到り、暫し待たせ給へ。とて内に入り、やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に布の小紋の羽織を着たり。彼の

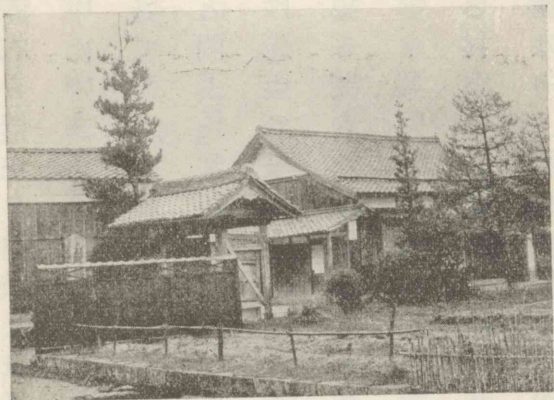


藤樹先生
士人驚きて、
さてく町
寧なる男か
な。墓だに
教へ得さす

れば満足なるに、と思ひもて行くうち、墓所にいたりぬ。彼の農夫竹垣の戸を開き、いざ入りて拜し給へ。といひて、其の身は戸外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め着たるは、我が爲にはあらで、先生を敬するにありけりと心付き、さても汝は藤樹の御家

來筋の者にてやある。と問へば、さには候はず。されど此の村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるなし。『親をうやまひ、子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず。』と、我が父母も常々訓へ候ひぬ。と語る。士人も、初は只なほざりに一見の心にて來りしが、此の農夫が様子を見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。此の事耳に残りあれば、此の度よき序なれば墓にも謁し講堂をも一見せばやとおもひて、大溝の東の加茂といふ所より、南へ入る事八丁にして、小川村に至る。農夫老婆までも、くはしく道を教へ、迷ふこともなく、講堂の前に出でたり。雨戸とぞしあれば、其のとなり志村周助といふ醫者の許へ案内して、講堂を拜したき由いひ入るゝに、まづ玄關へ上り給へ。といふ。草鞋がけなれば、只かりそめ

に講堂の案内を、といへど、強ひて足すゝぎの水など持來るまゝ、やむことを得ず、草鞋脚絆など解きて玄關へ上るに、周助出て迎ふ。



藤 樹 書 院

四十ばかりの總髮くちげなり。茶煙草の世話も行届きたり。余講堂を拜見し、神主をも拜したき由乞へば、周助奥に入り、禮服を着て、講堂の鍵を手に持ち、いざ來り給へ。と引連れて行く。

さて講堂を開きたるに、堂は萱葺にて、間數四間あり、書院南面にて十五疊、縁側あり。向うと西脇とに押入あり。此の書院、講場なり。其の次對客の間、八疊に床あり。其の次十疊、其の次臺所なり。正面縁側の上に藤

樹書院と云ふ四字の額あり。分部昌命拜書とあり。押入の内に深衣を着たる繪像あり、釋菜の時の圖と云ふ。其の前に厨子あり、中に神主あり。

さて悉く見終へ、周助宅に戻り、いかなればかく此の堂を司り給ふと問ふに、父祖代々門人にして、殊に昔よりかく隣家に住み、今にては先生の子孫も無ければ、かくは預り來れるなり。殊更、今にてはよき門人もなくなりぬれば、毎月六度づゝ村民を集め、論語を講ずるも、某無理に其の人に當てられて勤め申すなり。又春秋の釋菜を村中集り勤むるにも、某を頭取とせるゆゑ、かく鍵をも預り居る事なり。講堂の修復は領主より力を添へられ、領主も折々參詣あるに、禮服を着せずしては、堂中へ入り給はずとなり。それより先生の出處を尋ぬるに、先生三十餘にて、伊豫の大洲侯の

備前

備前岡山の城主池田光政。

熊澤

名は伯繼、通稱次郎八、山と號す。池田光政に仕へて功あり、元祿四年歿す。年七十三。

招に應ぜらる。先生の老母船をきらひ、四國に渡り得ず。江州に残り居て先生を案じたはる、故やむことを得ず、強ひて官祿を辭しいとまを願はれしに、侯惜しみてゆるしなれば、願既に三度に及びて後、願書を出しずして、大洲を忍び出でて歸り去れり。定めて追手を向けられて重く罪せられんかとして、直には江州へも歸り得ず、京都に深く隠れて住居ありしが、元來孝心より出でたることゆゑ、侯も罪し給はず。何のさほりも無くいとまをたまはりぬ。それより江州に歸り、老母を養はれしなり。其の後諸國の諸侯より招ありしも、再び仕へられず。備前の招にも、門人の熊澤をいだされ、幾ほども無くて死去あり。僅かに四十二歳なりき。熊澤先生は其の門人なれど、其の功績すくなからず。げに今時は得難き人とぞ思はる。

此の人藤樹先生に従はれはじめを尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より輕尻かろじりの馬を雇ひ榎木えのきの宿に泊る。馬かたは河原市へ歸り、馬のすそを洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。取りあげ見れば金二百兩あり。馬かた大いに驚き、今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其のまゝ榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至りて對面し、委しく尋ね問ふに、相違無ければ、其の金を取出し返しけるに、飛脚は死したるものの蘇りたる心地して、悦のあまり、行李より別の金子拾五兩を取出し、馬かたに與へ、もし此の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。さればこの高恩中々言葉のいひ盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。と涙を流し悦ぶに、馬方大いに驚きし顔色にて、そな

たの金を、そなたの取納め給ふに、何の禮をいふことあるべき。とて手にだに取らず。色々にこしらへいへども、さらに受けずして歸らんとする故、やむことを得ず、十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々へらして、終には金二步となし、せめて是ばかりは我が心の悦なれば受け給ふべし。さなくては、我が心もすみ申さず、今宵もいねがたし。と、理を盡くし詞を盡くしいふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を給はるべし。是は、今夜休むべき所を是まで追ひかけ來れる賃錢なり。是は我がとるべき錢なれば申しうくべし。といひて、二百文にて酒をかひ、其の家の人にふるまひ、我も亦飲みて歸らんとす。飛脚も感に堪へかね、さるにても、

そこはいかなる人にておはすと問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ所あり、此の村に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行きて聞き侍りしに、親には孝をつくすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず、などといふ事、常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理無しと心得しまでのことなり。といひすてて歸りぬ。飛脚はそれより京へ上り、いつもの宿に到り、さて此の度は辛き命いきのびて、各方にも對面することなりぬ。とて、ありし次第をくはしく語るに、折ふし其の家の裏に、熊澤次郎八田舎よりのぼり居て、學問修行最中の事なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。とて、其の翌日すぐに江州

に到り小川村を尋ねて、隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし。とて、さらに隨從をゆるし給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゞずみて歸らず。藤樹の老母是を氣の毒がり、よしや先づ内へ入れ申せよ。とありし故、いなみがたくて内へ入れ、つひに師弟の契約をせられしよし。其の後藤樹を備前より招き給ひしに、其の身は病身なりと堅く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべき者なり。とて、熊澤を出されけり。いづれも格別の事どもなり。

長物語なれど、藤樹先生の事跡くはしく知らぬ人も多ければ、見聞き及ぶ所を書付けぬ。江州に遊ぶ人は、必ず彼の講堂を見るべきことなり。(東遊記卷四)

二 羽州の鬼

小佐川
羽後國由利郡
にある。普通
は小砂川と書
く。
申の刻
午後四時頃。

出羽國小佐川といふ所にいたらんとする頃は、はや申の刻も過ぎつらんと覺えて、山の色もいとくらく、殊にきのふよりしめやかに雨降りて、日影もさだかには知れず。先の宿までは又三里もあれば、とても日の内にはいたりたかるべし。されど雨中なれば、思の外に時刻移らぬ事もやあらんと疑ひて、行き逢ひける老夫に、先の宿までゆくに日は暮れじやと問ふに、眉をひそめ、道をさへ急ぎ給はば行きつきもし給はんなれど、見れば遠國の人々にこそ。此の程は此の邊に鬼出てて人を取り食ふ。初は夜ばかりなりしが、近き頃になりては、白晝に出でて、此の道行きかふ者は、人馬の差別なく食はれざるはなし。是までの道も鬼の出でぬる所なるに、く

養軒
橋南翁の弟子

はれ給はざりしは運強き人々なり。是より先は殊さら鬼多し。旅するも命のありてこそ。何いそぎの用かは知らねども、日暮に及んで行き給はんは危しと云ふ。養軒も聞くより笑ひて、いかに邊土に來ぬればとて、人を驚かすも程こそあらめ。鬼の人を取り食ふなどは、昔、草双紙などにある事にて、三歳の小兒も、今の世には信ぜざる事なり。其の鬼は青鬼か赤鬼か。虎の皮のふんどしは古しや新しやなど嘲り戯れつゝ、暫し來て、猶時刻のおぼつかなければ、あやしむ藁屋に入りて、日あるうちに向うの宿まで行着くべしやと問ふに、此のあるじもおどろきし體にて、旅の人は不敵の事を宣ふものかな。此の先はかばかり鬼多きを、いかにして無事に行過ぎ給はんや。昨日も此の里の八太郎くはれたり。けふも隣村の九郎助取られたり。あな恐ろしといひて、時刻の事は答

へもせず。「同じ様にも人をおどろかすものかな」と笑ひて出てつ
つ又人に問ふに、又鬼の事いふ。怪しくも猶をかしけれど、三人ま
で同じ様に恐れぬるに、何とやら誠しやかにもなりて、養軒、何とか
思へる。言葉もあやし。殊に日足もたけぬと見ゆ。雨猶そほ降
りてけしきも心細し。さのみ行くさき急ぐべきにもあらず。人
里に遠ざかりなば、せんかたもあるまじ。猶くはしく尋ね問ひて、
鬼の事はば、今夜は此の里に宿りなん」といへば、養軒も同意して、
それより家ごとに入りて尋ね問ふに、口々に鬼の事いひて舌をふ
るはして恐る。さてはそらごとにあらじ。故郷を出でて三百里
に及べば、かゝる奇異の事にも逢ふ事ぞ。さらば宿を求めんと、あ
なたこなた宿をこひて、やう／＼六十に餘れる老婆と、二十四五ば
かりなる男と住める家に宿りぬ。

足すゝぎて圍爐裏によりて、木賃の飯をたき／＼も、又彼の鬼の事
尋ねれば、老婆恐れをのゝきつゝ、何事かいふ。邊土の女、其の言葉
一しほに聞取り難くて、何事をいふともしれず。「さらば其の鬼は
いかなる形ぞ。額に角を見て、腰に虎の皮のふんどしせりや」とい
へば、只犬の如くにして少し大なり」と云ふ。「せい高く口大なりや」と
と問へば、その如し」と云ふ。「さては狼にては非ずや」といふに、狼と
もいふと聞きたり」と答ふ。養軒顔を見合せ、さては大かたならぬ
恐なり」といふにぞ、先程よりの詞ども俄かに誠になりし心地して、
恐ろしき事いふばかりなし。段々くはしく聞くに、此の小佐川の
人も六七人も食殺され、きのふも、此の向うの有耶無耶の關の者に
飛びかゝりしに、彼のもの強勇の男にして、ひしと組付き、一身の力
を出して、つひに狼を組みふせたりしに、身に寸鐵も無ければ、組み

有耶無耶の關
羽後國由利郡
の西南隅にあ
る。

ふせはふせながら、いかんともしがたし。やうくにかたはらの石をひろひ、其の石を以て狼の頭をたゞき碎きて殺しぬ。されど、其の身も數箇所手負ひて、家に歸りて死せり。など、此の間の事ども、恐ろしき限り取集めていふにぞ、是は狼に病付き、白晝にも數十疋出でて人を害するならん、我々、禽獸のために、此の邊境に來りて命を失はん事、いかにも口惜しきことなりと思ひめぐらせば、其の夜は目もあはず。是より歸らんにも危し、行かん事も猶さらなり。此の里に住みはつべき身にもあらず。盜ならば衣服を與ふべし、仇ならば智略をも施すべし。いかにせん、異類の獸の爲に勇を振はんこと、誠に虎を手打にするたぐひにして、志ある者のすべき事にあらず。されど、さしあたりたる事にせんかたもなく、殊にあすのみに限らず、行先は連山波濤の如く見ゆれば、あの中を越え行か

んに、いかなる此の上の猛獸か出でんと、あらぬ思を費して、程なく夜はあけぬ。中々に打立つべくもあらねば、件の男をよびて、此の里に馬あらば二疋かりて與へよ、賃錢はいとはじ。とひたすらに頼みしに、駄賃馬は此のあたりには無し。などとしぶく、にいひつゝ出で行きしが、程なく歸りて、馬二疋しかく、の賃にてさきの宿までかり來れり。その上、此の近隣に秋田へ越ゆる商人兩人宿り居て鬼に恐れ、是も馬二疋をかりて居たりしが、そこたちの事をいひたれば、よき道連なり、同道して給はらんや。と某に頼めり。と云ふ。さてはよき味方を得たり。此方よりこそ頼みたきものを。と、それより彼の商人と申し合せ、彼の兩人に此方兩人、馬四疋に馬士四人、手毎に長き棒を携へ、鹿狩などに出づる様に出立ちて、小うたうたひ連れ、大勢のいきほひにさゞめき出でたれば、少しは安堵して、

昨夜思ひわづらひし程にもあらず。されどもしや出て來らんかと、四方に眼をくばり行きすぎしに、運よくて無難に向うの宿につきたり。關こゆるあたりにては、彼のきのふ石にてたゞき碎きし狼の顛ばかり落ち残り。其の體は何方へ取去られしか見えず。見るだに恐ろしきことなりき。誠に此の道筋三里が程は人家もなく、高き芝原にて、細き道筋數々つけり。病なくとも狼の出づべき土地とぞ覺ゆる。なほ其の先の宿々も、彼の商人と一組になり、みなく馬に打乗りて用心堅固にして行きしに、五六里が程過ぎしかば、鬼の沙汰もやみぬ。誠に人を取り食ふもの故に、此のあたりにては狼を鬼といふなるべし。古風なる事なり。程過ぎて今に至ればをかしき物語ともなりぬれど、其の時の物あんど筆の及ぶ所にあらず。(東遊記後篇卷四)

三 飯野の風穴

日向國霧島山の西北の方に飯野といふ所あり。こゝに大きな穴ありて、時々風を吹きいだす。昔より其の奥を知る者なし。ある年、那須大右衛門といふ武士、飼ひなれし犬を引きつれて狩に出でしが、ふと殊にすぐれて大いなる鹿一つを狩りいだし追ひかけしに、其の走ること風の如くすみやかにして、逸物の獵犬なりしかど、追ひつきかねて見えしが、とある山ぎはにいたり、鹿犬ともに見うしなひ、いかに尋ねれどもさらに見えず。聲のかぎり犬を呼びしかど、つひに歸り來らず。大右衛門大いにあやしみ、日暮れてまで草をわけてたづねさがししかど、たづね得ずして、むなしく家にかへりぬ。

年久しく飼置きし寵愛の犬なれば、行方しれずとて捨置くべきにあらず、殊にまた、大右衛門こそ鹿に犬をとられしかと、人に指さ、れんも口をしきわざなりとおもひめぐらすに、其の夜も寝ね得ず、明日を遅しと、再び飯野にいたりて又たづね求むれども、いづくをそれといふべきたよりもなければ、只茫然としてあきれ居たりしが、つくんとおもへば、此の見渡し廣き野原にて、見うしなふべきやうやあらん。只いぶかしきは其の風穴の中なり。鹿の逃入りしにしたがひて、我が犬も追入りしならん。さあらば、いかなるあやしき事かありて、我が犬の害にあひしもはかり難し。いて此の穴に入りて實否を見とゞけんものと思ひ、いそぎ家に歸り、繩よ松明よと、しきりに穴に入るべき用意をなす。妻子朋友此の體を見て大いに驚き、むかしより底のしれざる彼の風穴、いかなる變事

あらんもはかりがたし。僅に一疋の犬の爲に、此の身を輕んずる事、ひがごとなり。と口々に諫め、妻子などは泣沈みて留めしかど、大右衛門さらに聞入れず、皆々にいとまごひをなして、彼の風穴におもむきぬ。ぜひなくも皆々従ひ行きぬ。

大右衛門は腰に細引の綱を付け、おぼえある一腰を帶し、左の手に松明をともし、もし穴の底より此の綱を引かば、急に上に引きあげべし。と約束して、つひに穴の中にぞ入りにける。すぐさま下るところもあり、また斜に行くところもありて、やゝ深く下るほどに、地やはらかにて綿の如き平なるところにいたりつきぬ。松明を以てこれを見れば、木葉落入りて年久しくなり、朽ちたるが積りてかくやはらかなるなりけり。此所より奥は、穴少し細くなりて左右にわかれたり。いづれの方にか入るべきと、地に耳をつけて聞

試むるに、左の方の穴の底と聞えて、かすかに犬の鳴くやうに聞ゆ。さらばとて左の穴に入る。其の深きこと限りなし。やう／＼に入るにしたがひて、犬の聲たしかに聞ゆるにぞ、悦び勇みていそぎ下るほどに、其の犬大右衛門が裾に飛びつきけり。これ我が主人の來るを知りて、力を得て悦べるなり。其所に落ちつきて見るに、我が犬はつゝがなし。其の地暫く平にして、向うには大河流れたり。「怪しきものあらば出て來れ」と怒りのゝしりしかど、答ふるものも無ければ、久しく居るにもあらずとて、犬を抱き、やう／＼に匍ひのぼる。千辛萬苦してやう／＼もとの二道にわかれたる、木葉ふりしきし所までかへり上りぬ。此所よりは道急にしてのぼりがたければ、下げ置きし綱に犬をからめつけて、其の綱を下より引き動かしかば、上には待ちまうけたる事とて、いそぎ手々に綱を

たぐり上げしに、犬ばかりを引上げたり。驚きあやしめど、此の犬かく上り來るからは大右衛門もつゝがなしとさとりて、又綱を下しやりぬ。今あげたりし犬またしきりに穴に飛入らんとするを、人々繩もて厳しくからめつけて入れず。此の犬、主人の未だ上り來らざるを以て、氣づかひて又穴の内に入らんとせしなり。大右衛門も綱の下り來るを見て、みづから腰をからみて引き動かかしに、人々悦びいそぎ引上げて、再び死せるものよみがへれる心地して、つゝがなかりしを喜びあへり。鹿の行末はつひに知れず。疑ふらくは、此の穴の内住所なれば逃入りしを、犬の追入りしにや。大河より奥は、犬も翼なればいたり得ずして残れりと見えたり。犬よくものいはば其の時の様子も知るべきにと、人々をしみあへり。すべて薩州領の人は、かくの

如く死生をかへり見ず、勇猛の氣諸國に勝れたり。(西遊記卷之二)

四 孝行

孝子太郎八并に妹萬龜は、薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の百姓治右衛門の子なり。太郎八當年十四歳、萬龜は十二歳なり。幼少の時よりふたりとも孝心にして、生れつき柔和に、兩親の事かりそめにも忘るゝことなかりき。

去る酉
安永六年。

去る酉の九月、兄太郎八は九歳、妹の萬龜は七歳とき、其の母産後未だ日數たゞざりしに、時節の事なれば、稻取入のため田へ出でて働きしに、俄かに病さし起り、それよりいろく養生せしかども、さらに心よからず、今年まで六ヶ年が間床につき、ぜんく病につかれ、起臥さへ自身にはならざるに、ふたりの子ども、幼少ながら常

に母の側につきそひ、おきふしの手傳より、食物の事にいたるまで、こまやかに氣をつけ、母の不自由なきやうにこしらへ、病中の事なれば、母に心をつかはせ、又は腹立たせてはあしかるべしとて、たとひいかやうの無理なる事ありても、あいくとのみ機嫌よく返事して、少しも母の氣に逆らはぬやうにせり。

元來小百姓の事なれば、少しばかりの田畠を持てるが、太郎八幼少ながら耕作の事をもつとめけり。留守のことは、妹にいひふくめて氣をつけさせけり。妹も亦かひくしく心をつくし、其の孝養兄におとらず。太郎八も夕方早く歸り、先づ其のまゝにて母のそばへ寄りそひ、手を握り顔をなで、其の日の母の氣色くはしく尋ね、又我が田地のやうす、其の日にありし事ども語り聞かせ、粟の穂又はから芋などを出して母に見せ、とかくして覺えず時を移し、つひ

に夕飯をもわすれし事多かりしとなり。夏の夜など、百姓のわらや、殊に蚊帳の中一しほあつけければ、母も不便ふびんに思ひ、再三太郎八に、「蚊帳の外へ出でて夕飯たべよ」といへど、はなしすまざる間は飯もくはず、はなししまひて夕飯をくひ、また蚊帳の中に入りてそばに付きそひ、しづかに母を扇ぎ、こゝろよく世間話などして、其の身もうちくつろぎたる様子を見すれば、母も太郎八とはなしするにて、病の苦をわすれしとぞ。さて眠る前には、兄弟の子供我が耳を母の顔へよせて、右と左にそひふし、萬一夜中寝入りたる間に、母の氣分にもあしく、呼び起す時は、はやく目のさむるやうに心得してぞ臥しける。又冬など寒き夜は、みづから帶をとぎ、母の足をふところに入れ、抱きてあたゝめ、もし又母氣分あしく、いたみなどさし起り苦しむ時には、兄弟うちよりて背中をさすり手に取付き、自ら

薬を口に含みて母に飲ませなどして、泣きかなしみ、をさな心の氣遣ふ様子、側より見るには、其の病人よりも、かへつて兄弟の子供の方あはれにて、あたりの者共も、力をそへて介抱して遣しけり。母はかくのごとき子供の介抱にて、貧しき中にもつひに不如意のことを覺えず、病中に六ヶ年の月日を送りしに、其の病日々に重りて、今年の五月空しくなりぬ。兄弟の子供のなげき、中々いはんかたなし。さてあるべきにあらねば、親類うちより葬送の事をいとなみしに、二人の子供かなしみなげきて、今生にて母の顔をみる事はまでなれば、葬送の期を一日なりとも延べたし。とて、晝夜母の屍の側を離れず泣沈みしかば、此の體を見聞く人々、涙を流さざるはなかりき。

去年
天明元年。

去年八月十八日、郡奉行得能左平次とかや、勸農の爲に村方巡行の

時、小山田村の道の傍に、十二三歳の小兒草を刈りて居たるを見て、ねんごろにいひなぐさめて通られければ、後に従ひし庄屋三島喜左衛門、此の小兒は當村の太郎八と申すものにて、しかんゝの孝子なり。とつぶさに語りければ、得能氏感心ありて、其の夜の旅宿にて又此の事を尋ねられけるに、宿の女房よく知り居て、くはしく物語しけり。其の次第庄屋の申す所に少しも相違なければ、其の夜近邊の百姓を召集めて、此の事を聞きたゞされしに、孝行いよく相違なかりしかば、翌日得能氏自身太郎八の家に行き、其の様子を檢分し、また其の母に尋ね問ふに、つゆ違はざりければ、早速こまやかに書付けて太守へ言上ありしに、太守も奇特におぼしめし、御褒美として、兄太郎八に米二十五俵、妹萬龜に錢五貫文をぞ賜ひける。母もそのころ病やゝ重り居たれども、餘りの有難さに、人々にたす

けられておきあがり、たまものをいたゞきしとぞ。右御褒美たまひけるとき、近村の百姓、馬數十疋におはせ、太郎八が家に運び來りしかば、これが孝子への御褒美なりと、遠近の人々立ちつどひ、ほめうらやまざるはなし。得能氏よりも錢一貫文を與へられしかば、庄屋村役人、其のほか近きあたりの寺々まで、おもひくゝにそれぞれのものをおたへおくりぬ。得能氏、勸善のためにとて、そのほとりの男女に命じて、太郎八が家に行きてよろこびをいはしめ、また上よりのたまものを拜見せしめらる。このことつひに國中にかくれなく、人みな兄弟の子どもの孝行を稱美し、兄を孝太郎とよび、妹をお孝とぞ名付けける。

われ近年醫術修業のため、諸國にあそび、薩摩國にしばし逗留の折ふし、増田熊介といふ人、此のことを稱歎せらるゝを聞きはべれば、

梓に云々
薩州孝子傳を
出版したるを
いふ。

人の子の手本ともなれかしと思ひ、かつは國守の御仁政のあまね
きをあふぎ奉り、また得能氏仁慈の心ふかきを感じ、その言上書の
うつしをこひもとめて、ありしまゝを書きしるし、梓にちりばめぬ。
嗚呼わが母にも去年おくれぬ。世上の人々、父母存生の内、孝心お
こたりたまふべからず。(西遊記卷四)

六 いろは文庫

五十四卷。爲永春水の著にして、赤穂義士復讐の顛末を叙したる小説
なり。書中の人物すべて變名を用ふ。初編の出版は天保七年にして、
以下年を逐うて刊行し、第五十四卷に至りたれども遂に完からずして
やみぬ。

爲永春水は江戸の人天保十三年七月歿す。年五十四。

玄藏の古徳利

極月十三日、今日は朝より雪降出し、寒さ烈しく、北風は皮膚に石の
針をさす如くに覺ゆる厚氷、軒のつらゝに袖冷ゆる、その夕暮の事
なりしが、玄藏はいつもの如く、酒に寒さを防ぎても、防ぎかねたる
肌薄な、姿に着たる赤合羽、饅頭笠も白菅が、煤びて絲のほつれしを、

玄藏
赤穂源藏の變
名。赤穂四十
七士の一人。
極月十三日
元祿十五年十
二月十三日。

首かみに頂く主君の恩義、忘れぬ人とはなかく、見えぬ足もと降埋む、雪を蹴立つる酒機嫌、秋津嘉侯あきつにかの御屋敷内、兄の芝多の門の口、よろめき込みたる勝手口、臺所の上り端、腰をどつさり、倒るゝやうになるをうしろへ手をつかへ、舌も廻らぬ獨言。下女はそれぞと見るよりも、朋輩の女と顔見合せ、一人は奥へ、一人は立つて上り口、「玄藏様いらつしやいまし。今日はさぞお寒うございましたらう。」
「おい／＼親切に忝い。しかし此の身は、この通り好物の酒で寒氣を何とも思はぬが、お兄上あにいさんはどうぢや。雪のおあたりもないか。」

「いゝえ、お寒さのおあたりもなく、今日はお上の御客様で、先程から御殿において遊ばします。」

「はあゝ左様か。それではまづよしと。えゝそんならば、お姉上あねさまさ

んは。」

「あのお癪氣で、およつておいでなされます」と奥よりいで来る下女がいへば、玄藏はうなづきながら、

「むゝゝ、此の寒さでは、雪あたりの御持病も起るはずだ。どうぞ早く御快くおなりなさればいゝが、それではお逢ひを願ふも御面倒だらうから、お目にかゝらずに歸らう」といふも、酒ゆゑ舌の根もまはらぬ程に、板の間へ倒れかゝりて起直り、「えゝ」と言ひながら、膳棚の方へ指をさし、

「そゝその茶碗を取つて下さい。」

「はいお茶をあげますか。」

「いゝいゝや、只茶碗を借りて、酒の毒味をするのだ」と腰よりいと穢らはしき古徳利を取出す。徳利の口に結びたる繩にも泥の染み

てやあるらん、徳利の尻はふすぼりて、捨物にせし器に等し。

「どれ〜爛を頼むも面倒だ。冷ひやて一杯やらかさう」と手酌に引請け続け飲、舌うち鳴らし高わらひ、

「あは〜、此の酒は、お兄上さんの所へ土産に持つて來たのだが、お留守だからお毒味を仕過したぜ。いやまだ少しは残つてゐる。併しもう奥へは上げられまい。其方だちでも飲んでくりやれ」と徳利を下女に差出せば、さもいやさうに下女は請取り、かまどの際にさしおきたり。玄藏は身づくろひして、

「え〜と、お上にお客があつては、お兄上さんのお下りも遅からうし、お姉上さんも御病氣では、御暇乞も出來まい」と獨言をいひながら、下女を側近く招きよせ、

「いやこれお冬、今此の身がいふ口上を失念せず、確かにお兄上さん

のお歸りの時申し上げてくれ。きつとぢやぞ。」

「はい〜、忘れは致しませんから、早くおつしやいまし。」

「然らばいひ聞ける。え〜と、御兄上さんへ申し上げる口上はな。」
「はら。」

「昨年三月浪人致してより後、段々と御厄介お世話に相成りまして、千萬有りがたく存じます。殊には、酒癖のよろしからず、餘計に御苦勞もかけましてございますが、此の度やう〜時節到來致して、西國の諸侯へ主取仕つて、國許の供を申し付けられまして、明朝出立致します故、御暇乞に罷り出でましたる所、御留守にて御目に懸りませず、残念に存じます。萬一、此の後御目にかゝる事なく、拙者死去致しましても、御高恩の程は忘れ申しませず」と言ひつゝ、少し愁涙を催せども、お冬はいさゝか氣もつかず、

「なほ此の後は、お兄上さんにも、お姉上さんにも、御繁昌なされますやうにと、蔭ながらも祈念致します。」といひ終つて立ち上り、脱ぎすてたりし菅笠を手に取上ぐれど、來りし時結べる紐を引きちぎり、

輪も細紐も放れしかば、今

中 更に迷惑し、



「いや、こりやあ、いかない事をした。」と、笠を捨て、古びたる手拭頬冠り、出行かんとすれば、下女は呼止め、壁にかけたる菅笠を取りおろ

し、あゝもしあなた、これでも召しておいでなさいまし。」とさし出せば、

九つ
夜の十二時。

「いやこれは心付忝い。どりや急いで行かずばなるまい。其方たちも無事で春を迎へやれ。」といひ捨て駈出す兄の家、これ今生の見をさめと、思へば引かるゝ後髪。血脈ちすまの兄に對面もなさず、急ぐは約定の夜討の用意、着到の時刻に後れまじと、勇む心に愁を掃ひ、積る雪路踏みちらす、跡より埋む白雪に、かげも止めず立去りしが、兄なる芝多伊左衛門は、其の夜九つ頃に御殿を下り歸りしかば、内儀は出迎へ挨拶し、

「あの夕暮に玄藏さんがまゐられました。」と、下女に聞いたる通り伊左衛門に物語れば、

「はてな、久しく參らぬからどういたしたか、又極月ごくげつにさしかゝつて難澁なじぶの由を言ひに來るであらうと存じて居たのに、押詰つて奉公に有付くとは、まあ〜僥倖さうばんな事ぢや。しかし時分柄ときぶんがらに似合はぬ

西國行、合點がの行かぬ口上ではある。大方、それは供に行くのではあるまい。別段に國方の役目でもいひつけられて、當地を出立の事と思はれる。何に致してもこの寒さ、道中もさぞ難儀で困るだらう。どうぞ恙つがなく行く所へ着すれば宜いが。何だか案じられることだ。と、さすがに兄と弟との中、蟲が知らせの心にや、來し方行く末の事までも、思ひやりたる目上の慈悲、自然と涙を催すも、一世の別と、明くる日は、なるをも思はで休息と、氣を慰めに女房が勸むる酒に、聊かは氣鬱を忘るゝ、其の席にて、下女は、先刻玄藏が穢れし徳利へ酒を入れ持來りしより、手酌にて飲みつゝ、歸りしをかしさ、を、時の興にと物語れば、伊左衛門は苦笑ひ、

「いま始まつたことでも無いが、酒にかゝると、まことに人間の情はないやうだが、まさかに年中あの通りならば、鹽谷家えんこで奉公も勤ま

鹽谷
淺野の變名。

る道理はないはずだけれど、酒興と本心とは少し相違もあるやうだ。又おれが了簡では、見處のある身持、といへば、弟の放蕩を人に繕ふやうだが、先達ても酒に酔うて臺所に倒れて、正體なしに眠つて居たが、おれが他所から歸りし眼前、困つたものと思ひながら、よくよく見れば、大小を前に引付けて、柄の所へ右手をかけ、自ら用心の體に見えた故、わざとおれが足音高くしたれば、忽ちに眼を開いて、鯉口四五寸抜きかけしが、おれが顔を見て恥ぢたる顔色、そのまゝにうつむいて、又正體もなき風情、されどもほつれし籐卷柄の刀心やまこに似合はぬ、刃の眞精まこと、氷の如きたしなみは、武士の本意を忘れぬ覺悟と察して置いたが、違ひもすまい。どうぞ立身させたいものぢや」と語る間に時は移り、はや丑滿の鐘の音、かうくとこそ告げ渡れ。

高野
吉良の變名。

此の時刻には、かの玄藏、同意の人々うち連れて、主君の仇と高野家の屋敷に押入りて、互に戦ふ最中なるべし。(卷之八)

此の時刻には、かの玄藏、同意の人々うち連れて、主君の仇と高野家の屋敷に押入りて、互に戦ふ最中なるべし。(卷之八)

七 東海 膝栗毛

八編。十返舎一九の著にして、彌次郎兵衛北八の二人東海道を旅して、さまざまの滑稽を演ずる趣向に書き成せり。蓋し滑稽小説の白眉といふべし。初編は文化十一年刊行す。

十返舎一九、姓は重田、名は貞一、江戸に住す。天保二年七月歿す。年六十七。その辭世に曰く、

此の世をばどりやお暇にせん香の煙とともにハイ左様なら。

座頭の川わたり

鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨つよくして橋落ちけるにや、行きかふ人、みづから股引をとり、裾まくり上げて、こゝを渡るに、彌次郎・北八も、いざや引連れ渡りなんとする折柄、京のぼりの座頭

鹽井川
遠江國の東部
掛川の附近。
彌次郎・北八
并に膝栗毛中
の主人公。

二人づれ、此の川の歩渡かちわたりなるを聞きけるにや、一人の座頭、大市「もし、川は膝ぎりもござりますかな。北八「さやうく。しかし水が早いからおめい方あ、あぶない。用心して渡んなせえ。大市「はて、なるほど水の音がよつぽど早い」といひつゝ、石を拾ひ、川の中へ投げこんで考へ、大市「いや、こゝらがどうか浅いやうだ。こりや猿市、二人ながら脚絆まきばんをとるも面倒だ。お主おぬし若役におれをおぶつて渡れ。猿市



十 返 合 一 九

「はゝゝゝ、ずるい事をぬかす。拳けんでまゐらう。何でもまけた者がおぶつて渡るのだ。よしか。大市「こりや面白い。さあこい」と、片手拳をうちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手を握り合

ひ、大市「さあ勝つたぞく」。猿市「えゝ、いまくしい。そんならこの風呂敷包を、貴様一所にしよはつせえ。それよしか。さあ來い來い」と支度して、背中を向ける。

彌次郎、これはありがたいと、猿市におぶされれば、猿市はつれの犬市と心得て、さつさと川へはいり、難なく向うへ渡ると、こなたの岸に残りたる犬市、やゝ猿よ、どうする。早く川を渡さぬか。猿市向うの岸にて聞付け、腹を立て、こりや、じようだんな奴だ。たつた今おぶつて渡したに、又そつちへ行つておれをなぶるな。大市「馬鹿いへ。おのればかり渡つて太い奴だ。猿市「いや、太いとはそつちの事だ。大市「こりや、おのれ兄弟子に向つて、言語道斷な。早く來て渡さぬか」と、白い眼をむき出し、腹立つる故、猿市仕方なく、又こちらへ渡りて歸り、さあ、そんならおぶさりなさる。命令、背中を出す。北八しめた



と手をかけておぶされれば、猿市又さつさと川へはいる。犬市は大
 きにせきこみ、これ猿市、どこにゐる。猿
 市川中にて、「いや、こいつは誰だ」と北八
 を川の中へどんぶりおとす。北八「お
 い助けてくれ、助けてくれ」と手足をも
 がき流るゝゆゑ、彌次郎飛込み引上ぐ
 れば、頭から骨までくさる程ぬれ、北八
 「え、座頭めが、とんだ目にあはしあが
 った。彌次「は、くは、まづ着物を脱
 ぎやれ、絞すつてやらう。北八「全體彌次さ
 んがわるい。何のおぶさらずといゝ
 事にお前が手本を出したから、ついおれも。彌次「川へはまつたか。

氣の毒な。は、くくく。
 それで一句やらかした。

はまりけり眼のなき人を侮りて
 むくいは早き川のながれに (三編卷之下)

八 眞書太閤記

十二編三百六十卷あり。秀吉一代の傳記なり。此の書もと尾濃の口碑に據りたる所多けれども、事實を謬まるもの少からざるを以て、栗原柳庵これを憾み諸書と參訂し、重修眞書太閤記と題して、世に公にせり。今據る所のものは是なり。

栗原柳庵名は信充幕府の家人なり。明治三年十月歿す。年七十餘。

一 木下藤吉郎信長に仕ふ

永祿元年九月、織田信長こなきやま小牧山こまきやまに狩せんと、柴田しばた權六ごんろく佐久間さくま右衛門ゑもん尉じゆうのぶ信盛等引具して、其の勢一千餘人にて、辰つるぎの刻ときに清洲きよすを發し、小牧山こまきやまにおもむき、面々習練の業をなし、鹿猿しかざる、兎うさぎ、小鳥こどりの類、鐵砲てつぱう、弓矢を以てうち取るもの數多かりしかば、暫時休息あるべしとて、麓の廣野

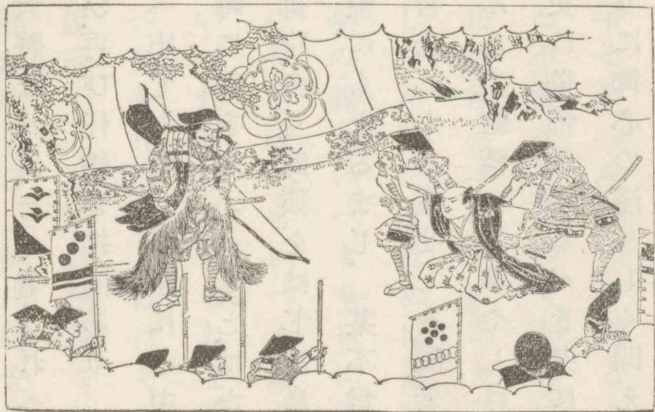
永祿元年
正親町天皇の
年號。
小牧山
尾張國。
清洲
尾張國。信長
の居城のあつ
た地。

に陣をすゑ、信長は床とこ几こに腰うちかけ、諸士の勳功を披露ひらくありける處に、木下藤吉郎最前よりこゝにありて待受け、休息の間をよき時節とすゝみ出で、大將の御前へ推參せんとす。士卒押しとゞめ、何者なればみだりに大將の御前へ押通らんとするや、無禮なり。と叱れば、藤吉郎、いや、願ありて大將の御前へ推參仕るものなり。苦しからず、通したまへ。と大聲にのゝしりつゝ、ゆかんとす。士卒等怒り、願あらば奉行所ぶぎやうじよへ申し出づべし。今日は御遊興の場といひ、案内取次もなく押通るは必定くせものなるべし。搦め取るべし。とひしめくを、大將はるかに御覽じて、何事なるぞ、見て參れ。と柴田に命じたまへば、權六はしり來り、その故を尋ぬるに、士卒等藤吉郎が無禮の始終をつぶさに述べたり。

柴田、藤吉郎に向ひ、汝は何國なにくにより來たるものぞ。大將へは何の願

ありて無體に推參せんとする。疑はし、他國よりの間者かんしやなるべし。さなくば敵國の刺客ならん。ありのまゝに白狀すべし」と責めければ、藤吉郎少しも動ぜず、某は御領地に出生せしものにて、先にも申しし如く、大將へ直きに御願の筋ありて参りたるものなり。いさゝかも御心置なく御披露あるべし」と事もなげに申しければ、柴田怒りて、汝輕々しく願ありなどは粗忽ろこつ千萬なり。直々に御前へ出でんとするは曲事まがことなり。斬つてすつべき奴なれども、御遊の妨なれば一命はゆるすぞ。はや／＼退去すべし」と叱りければ、藤吉郎はこれを聞き、その許もとの仰にて有難しとて歸るほどならば、ここに來らず。たゞ願の筋と申して、別の仔細しじゆにあらず。奉公の望ありて參上仕り候なり。まげて御前へ御伴ひありて、大將の見參に入れたまへ。大將御覽じて、御抱へあるまじとの仰ならば、速か

に退去仕るばかりなり。たゞ大將の御一言聞かまほしく、直訴ちよそは



めたり。

仕るなり。とかく隙入れたまふは、かへつて御狩の妨なり。疾く／＼言上あれかし」と詞よどまず申しはなてば、權六いよ／＼怒り、奉公の願あらば、それ／＼の分にしたがつて推舉を得べし。下郎の分として大將へ直訴せんとは、身の程しらぬ不敵奴なり。これまことに敵國の間者なるべし。搦め取れ」と下知せしかば、士卒大勢立ちかかり、藤吉郎を取つて引きふせ、いまし

權六右の趣を言上なしたるに、信長もとより大勇にして思慮深き大將なれば、その者これへ引出ださせ、つくづくその有様を見たまひ、再び仔細を推問あり。權六承りて、傍より願の如く大將の御前へ出でたり。直きに心中を申し上ぐべし。いさゝかも偽らば、即時に誅を加ふべし。とはたとにらめば、藤吉郎にこと打笑み、今日の御狩、多く鹿猿をはじめ、鳥獸を得たまへども、國を取擴げらるべき便にもなるまじ。某不肖ながら、よき御獲物あるべき狩の仕様を言上せんと存ぜしを、問者刺客の類と思召され、既に一命をめされんとの結構こそあやしけれ。その上、かくの如く搦められし上は、更に御怖れあるべき某にあらず。然るを猶疑ひたまふことは、餘りに御心の淺々しく聞えて候。仔細は先に申し盡くしたり。今又何ぞ別に申し上ぐべけんや。と云ふ。柴田聞きて、まことに白狀

に及ばざること奇怪なり。我が君によき獲物をすゝめんとは何事ぞや。卑賤の下郎として國主を恐れず、みだりに言葉を放つこと不敵なり。とのゝしれば、藤吉郎既にかくの如く搦められて、存亡共に各、の手の中にあり、某何しに偽るべき。奉公の望ありと申ししを用ひたまはぬは、獲物を捨てたまふにあらずや。一疋の兎、一羽の鶉といへども、目にかゝりたらば必ず捕りたまふべし。いはんや卑賤ともいへ下郎ともいへ、士一人に於てをや。人と鳥獸と、いづれを取りいづれを捨てたまふか。下郎ともいへ卑賤ともいへ、是を用ひたまはば、それゝに應じて役に立つべし。と、詞正しく説盡くししかば、信長これを聞き、まづ柴田に命じて藤吉郎が縛を解かせらる。柴田縛を解くといへども、油斷せず、すはといはば組伏せんと身がまへたり。

信長柴田を傍に坐せしめ、藤吉郎を近くめさる。藤吉郎かしこみて近寄り平伏す。信長いはく、汝我に仕へんとの望ある由汝がいふ如く戦國の時なれば、士は大切のものなり。卑賤凡下をいふべからず。人相骨法にもかゝはるべからず。我が國を富まし我が兵を強くする術あらば、扶持して得さすべし。いかなる策かある、試に語るべし。と申さるれば、藤吉郎承り、別の所望としては候はず。たゞ某が主君と頼み奉るべしと存じ候ゆゑに、かくは推參仕り候と言上す。

時に佐久間右衛門尉すゝみ出で、君をえらびて奉公せんとは、定めて君の器量を見る處あつて申さるゝならん。さては其方にもそれほどの才藝なくては申さるまじ。いかなる能あるか、試に申すべし。と云ふ。藤吉郎いはく、能と申せば一能もなし。藝と申せば

一藝もなし。たゞ膽の大きいなること斗の如く候のみ。と答ふ。柴田いはく、汝藝もなく能もなしとか。もし召抱へたまはば何の役をか望み申す。と問ふ。藤吉郎いはく、家老衆は家老衆の忠義あり。若黨は若黨の忠義あり。中間ちうけんは中間の忠義あり。我等奉公に何の役を願ひ何の勤を望むべき。何役にもあれ、上かみより仰せ付けられ次第なり。と申せば、信長いよく、不思議に思ひ、望の如く抱へつかはすべし。只今役目を極きまむるに及ばず。何にもあれ、關かけたる役義を申し付くべし。面貌は猿に似たり、小猿よく勤めよ。とたはむれたまへば、是より藤吉郎と呼ばず、小猿々と人々も呼びしとかや。されども藤吉郎は少しも意にさしはさまず、信長の直ぐに抱へんと宣ひしを悦び、それより同勢に加はりしを、柴田はじめ快からずおもふといへども、信長は殊の外に悦び、今日の狩の獲物は

小猿にあり。はや歸城すべし。とて、是より勢子を止め、清洲へかへられけり。(初編卷之十)

二 藤吉郎の出精

藤吉郎は新參なれども、二代の奉公といひ、殊に父彌助が勤功もあれば、父取來りの通り扶持を與へ、勤向も先代の通りたるべしと申し渡されしに、藤吉郎承り、藤井又右衛門に就きて訴訟しけるやう、「父功勞あるを以てその如くなし下されんこと、ありがたき仕合には候へども、父はさるべき功ありてそれ程の御扶助を賜はり候。某事はいまだ寸功もなく、その上、父一旦御暇賜はり、御代も既にかはりぬれば、全く新參の某なり。何事にもあれ、相應の功を立て候上にて恩祿に預かり候はば、冥加よろしく候はんと存じ奉り候。

卯の刻
午前六時。

もし先代の由緒により御恩蒙むるべくば、先代の過を以て御勘當をも蒙り候はんか。たゞ此の身の一つを以て、御目鏡によりて御奉公申すべく候。と申しければ、信長聞し召し、いよく感悦ありて、さらば所望にまかせ、そのまゝにいたし置くべし。然らば言語と所行とを試むべしと伺ひ居たまひけるに、藤吉郎朝より夕にいたるまで奉公に油斷せず、身命をなげうちて出精したり。信長馬を責めんとて朝はやく出でらるゝこと度々なれども、いつも藤吉郎一番に出仕して待ち居ること一日もおこたりなし。その年の冬、嚴寒のみぎりといへども、信長剛氣勇壯の大將なれば、雪氷をもいとはず、卯の刻より馬を責めらるゝこと平日の如くなりしが、一日いつもよりもやゝはやく出でられたり。殊にその朝は雪ふり寒風はげしかりけれども、玄關に出でられて、誰ぞと申され

しに、藤吉郎つとまかり出でたり。信長、汝より外に人はなきか。と問ひたまへば、さん候、いつもより御出の時刻早く候へば、いまだいづれも參上仕らず。と申す。信長、然らば汝はいかにして出でしぞ。と問ひたまへば、藤吉郎は、今朝のみに候はず、毎朝一時前に參上仕り候故、今朝の如く御出早く候うても、御先に伺候仕り候。と言上しければ、信長大いに感じ、尋常よつぱの生れつきならんには、今朝の寒氣におそれて遲滯すべきに、汝一人退屈の心なく、毎日はやくまかり出で候事、神妙々々と仰せらるれば、藤吉郎承り、總じて人の勤は心より出で候事にて、心さへたしかに候はば外に苦勞はなきものなり。只今空寒く地凍りて候へども、我が身のためぞと存じ候へば、さして苦しくも候はず。奉公なりと存じ候へば、寒く堪へがたくおぼえ候。此の身は主君に奉れり、我が身にして我が身にあらざと存

じて候へば、更に退屈仕らず。然るを過當の御褒詞、かへつてこの身の仇となるべく候。人を思ふは身を思ふ故と申す諺もよく聞きえて候。と申せば、信長理に伏し、奇特くわつてつの了簡れうけんなり。然らば寒くとも勤めよ。汝が爲の奉公なり。小猿よくせよ。と戯れながら、馬を責められたり。

かくの如く奉公に骨を惜しまず力を盡くしければ、小猿々と愛せられしほどに、傍輩どもねたみそねみ、つひに藤吉郎と呼ばず、ただ小猿々とよびあざけりしかども、藤吉郎更に取合はず。もとより辯舌すぐれしものなり、雑談などしてもおもしろかりければ、自然と役人奉行などいふものも、徒然とだぜんの時は藤吉郎を呼寄せ、話などせさせて聞くこと度々なり。柴田權六是を聞きて、藤吉郎を呼ぶ。藤吉郎心得たりと、傍輩一人を同道して柴田が宿所へ赴きし

に、權六我が居たる處へ呼入れ、いかに藤吉郎、奉公出精のよし奇特のことなり。かつ面白き話を多く知りたりときく。今日は甚だ徒然なり。何にてもあれ、をかしき事語れ、聞かん」と望みければ、藤吉郎辭する色なく、辯にまかせて説出しければ、權六も笑壺に入りて興じ、酒宴を催し、藤吉郎にも盃をすゝめ、權六も大盃を引きうけ引きうけ數盃をかたむけ、酔のあまりに、權六枕を取りて横になり、藤吉郎に向ひ、吾子は萬事に巧者とときく。導引はいかゞぞと問ふ。藤吉郎、得たると申すにはあらねども、まねばかりのことは仕るべく候。まづ御腰を打ちて參らすべし」といひつゝ立寄りて、柴田が腰をもみ下げ、なしければ、權六また曰く、中々手際のものなり。かくばかり巧者なれども、小兵にして武士のわざには不足あり。しかし人々の望ははかられず、何事をか望むぞ。日頃大言をはな

ち、心高く大望ありと聞けり。ついでに語らずやといふ。藤吉郎聞きて、別に所望も候はず。さりながら、貴公の如き大名衆に我が足を洗はせばやと思ふのみと申しければ、權六むくと起き返り、さては腰を打たせしを奇怪に思ひ、我にあてつけたり。にくき言葉かなと怒りの、しりけるを、藤吉郎少しも動ぜず、人間の盛衰は、はかりがたきものなり。よりに某が如き卑賤の者にて、身を立つる時あらばかくと思ふが故に、所存かくさず申ししなり。我等今足輕の身分なれば、御家老の足腰を揉むとも、耻づべきにあらず。何とて奇怪と存すべき。只今申しし望は、某生涯にかなふべきことにや。あながち御心にかけるゝまでもなく候。よくよく御考へ思召せとて、空うそぶいて居たりしかば、權六怒を鎮めたりしかども、甚だ不快の體にて、藤吉郎を歸しけり。

同伴せし足輕、藤吉郎に向ひ申しけるは、柴田殿は御家老なり。殊に鬼神といはるゝほどの勇士なり。汝無禮の詞を出して、彼の人の怒にふれたり。身のわざはひをまねく種となりては氣の毒なり。誰ぞ人をたのみて詫言すべし。さらば其方の爲悪しかるべし」と申す。藤吉郎聞きて、氣の狭きことをのたまふものかな。何ぞ詫言に及ぶべき。柴田は大身にて家老役なり。我は小祿にて足輕なり。祿の大小と勤の高下はあれども、共に織田家の所従なり。我が臣ならぬものに腰うたせしは、彼の人の無禮なり。自ら無禮をなしてかへつて我を怒りかつ憎むほど智慧なき柴田殿ならんや」といひて、少しもおそるゝ氣色なし。これらよりして後、柴田・羽柴確執の種とはなりしなるべし。(初編卷之十)

桶狭間

尾張國の東南、三河國との國境近くにある。

前田孫四郎
前田利家。

柴田・池田・前田
柴田勝家・池田勝三郎・前田利家。

三 桶狭間の戦

さる程に、今川勢四萬六千餘騎、二手に分れて戦ひけるに、先手の合戦織田方強くして、今川方の侍大將二人まで討死し、又海道筋の軍も、前田孫四郎が爲に討たるゝもの多く、今川勢たやすく進み得ずといへども、味方は目に餘る大軍なれば、新手を入替へく攻めたり。織田方は外に援くる兵士もなければ、終には切勝つべしとおもふばかりをたのみつゝ突合ひたり。義元朝臣の本陣には、軍の注進を聞くに、庵原富永・穴戸江間討たれたる由なれば、義元朝臣大いに怒り、日頃にも似ぬ駿遠參の武者振かな。旗本の面々急ぎ馳向ひて、織田方にて今朝より手柄せしといふなる柴田・池田・前田を討取りて見せよや、方々と勇められ、我もくと打立つ程に、大將の

馬廻には、僅か一千餘には過ぎざりけり。その上、此の處けはしき山の峽間にて地形平かならず、後は味方の領地なり、前は軍勢段々に備へて、野も山も旗馬印ならぬ處もなし。されば用心の體もなく、芝居の筈に毛氈しき、酒宴して居たる處へ、織田方の勇士佐々木隼人・千秋四郎が首を實檢に入れしかば、義元朝臣氣色を直し、さもあるべし。旗本の諸士能くこそ働きつれ。義元が日頃の訓練はかくこそあれ。今に信長の首も來るべきぞ。尾州を平定せんこと遠からずと、事もなげに打笑ひ、快く盃を舉げて居たりけるこそかひなけれ。

織田殿は、鳴海表の関の聲、鐵砲の烟を餘所に見て、間道より今川の本陣をこゝろざし寄せられけるに、木下藤吉郎ひそかに今川の本陣へ至り、旗本の無勢なる體をうかゞひ見て、今こそ必勝の時なれ。

鳴海
桶狭間の西北
數里。

と見定め引返し、織田殿には、やかかけさせ給へ。とすゝめ奉りけるに、もとより織田殿眞一文字に大将の旗本へ切入らんと、馬をはやめ給ふ處なれば、いふにや及ぶと、鞭に鐙を合せて打ち給ふを、尾州勢はとかく危しと思ひ、今しばし敵の様子を見極めてのちに進ませ給ふとも遅からず。と留め奉る人もありければ、織田殿、やあ人々、無理に進まんといふにはあらず。敵は今朝より所々の軍に切勝ちたれども、つかれたるものも多かるべし。その上に大将、勝軍に心おごり、帯紐といて休息してあるよしをとくに聞きすましたれば、よき時節とはかりしなり。その上、味



方は今朝より負軍して、軍勢の心おくれであるなれば、深々と寄せかゝらんとは誰もく思ひよらず。かゝる處へとりかけて、敵の油断せし處を不意に切りふせ突立ててこそ、勝利をば得べきなれ。寡を以て衆に勝つとは、かゝる術を申すなり。これ天の與ふる所ならずや。されば此の合戦には、分捕を功名となすべからず。一向大將を討たんことをもつばらとすべし。と、例の大音聲にて仰せらるれば、仰すきまなし。いかさま、左様の時をこそまちつれ。と、はじめて夜の明けしやうに心もはれてぞ見えたりける。

かゝる處へ、木下雅樂助・中川金右衛門尉・毛利河内守・同新助・佐久間彌五郎手々によき頸とりて提げ來る。織田殿御覽ぜられ、手始よきぞ。敵陣の後の山へ押廻すべし。さあらんには、山際まで旗を卷きて忍びより、成るほど靜かに義元の本陣へ切入れや。と下知な

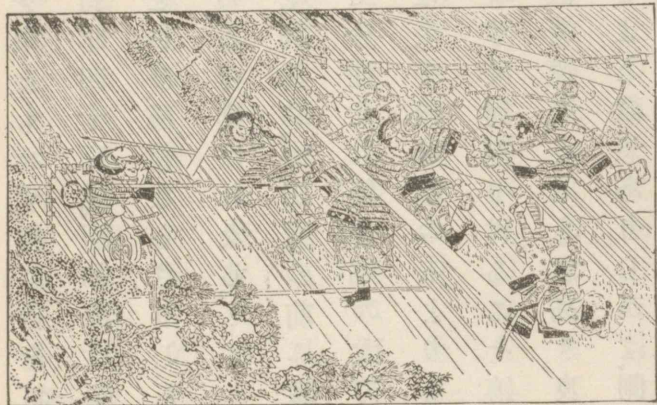
鷲津・丸根
鳴海の西南に
ある地。

し給ふ。築田出羽守進み出でて、敵は今朝鷲津丸根を攻めて、その陣をかへず候べし。されば此の分に押寄せ給はば、敵の後陣は先陣なり。今かゝり給ふ處は、敵の後にして即ち大將の本陣なり。かくてはなにさま大將の手に近寄りて候。唯急がせ給ふべし。と申しければ、いしくも心付きたるものかな。と高聲に宣ふ聲を諸軍勢承り、何さま然るべしと、ますく軍勢の氣を勵ましけり。

然るに織田殿開運の時節到來せしと見え、熱田の宮の方より黒雲俄かに村立ちて、大雨しきりに降りかゝり、大風砂を飛ばす音ものすぐく聞え、海の面墨をすり流しし如く闇くなり、浪の音遠くひびきける上、雷電霹靂して、世間たゞ今常闇になりつと見る程なりしかば、寄する味方の兵士さへ、敵陣近くなりしことをおぼつかなく思ふばかりの有様なれば、今川勢は、更に織田殿の帷幕の外まで

寄せしをしらず。本陣の上の山に上るやいなや、旗をさつとさし上げて、かゝれ者ども」と宣ふ聲の下より、織田造酒丞服部小平太宗次・林藤八郎興世・毛利新助秀詮・森三左衛門尉可成・中條小市信定・遠山甚太郎顯忠・毛利河内守・築田出羽守眞先に進んで駈けけるが、森三左衛門尉申しけるは、敵は大勢なり。下立ちてかゝりなば、その内に備を立つべし。足をためさせてはあしかりなん。馬にて駈入り、蹴ちらさばや」と申しけるにより、織田殿實に尤なり。さらば我を越せや、若者ども」と馬上に槍おつ取りて一番に進み給ふに、雨ますくはげしく、雲覆ひ下り、白晝なれどもあやめも分かず。喚き叫んで馬をはせ入れ、四角八面に突立て追立て切りひたしけるにより、今川勢大いにあわてさわぎ、謀叛人ありて斯かるや」といふものもあり、いやく喧嘩ぞ」と云ふものもあり、互に心を置合ひ、同

志打してつかみあふ者もあり。



けけるが、槍を捨ててむづと組み、刀を抜きて脇腹をさしとほし、終

義元朝臣は屏風引廻し、毛氈しかせ、緩やかにましくける處へ、木下藤吉郎走り來り、織田上總介信長見參のため參向せり。快く御首を賜はり候へ」と

いひも果てぬに、服部小平太宗次進みより、義元朝臣の右の太股をしたゝかにつく。されども最後はよかりけり、持ちたる太刀を取直し、小平太が膝のさらをぞ割つたりける。續いて、毛利新助秀詮と名乗りてかけより、槍をつ

に組敷き動かせず。此の時義元朝臣新助が左の指に嚙付きけるを事ともせず、終に首を打落し、太刀先に貫きて立上る。義元朝臣行年四十三歳、清和源氏の名家として、海道第一の大名といひ、武勇といひ、尋常ならざりしも、運盡きぬれば忽ちに戦場の土と消果てけるぞあはれなる。

毛利新助、織田殿の前に參上し、秀詮こそ大將軍を討留めて候へ、とて分捕せし松倉郷の太刀と共に實檢に入れしかば、信長悦喜限りなく、千顆萬顆の玉よりも、此の首ばかり得難きはなし。それをたやすく討取りけるこそ嬉しけれ。といひつゝ、義元朝臣の首に向ひ涙を流し、さしも名高き良將なりしも、かくなり給ふことの痛はしさよ。と歎息ありしかば、側に伺候せし侍どもも鎧の袖をぬらしけり。木下藤吉郎進み出て、我が君の千辛萬苦も、たゞ此の首一つを

松倉郷
郷義弘。越中
松倉の刀匠、
正宗の門人で
ある。元應年
間の人。

丹下
鳴海の北。

得給はんが爲、諸軍勢の粉骨も、たゞ此の首一つの故ぞかし。はや此の首を敵味方に見せ給ふべし。然らんには、味方は勇氣をまし、敵の殘兵は力を失うて、自然に崩れ候べし。と勧め奉りしにより、毛利新助再び太刀の先に貫きて、大音聲に、今川治部大輔殿をば毛利新助討取りたり。是れ見よや。とのゝしる側より、聲々に、大將討たれたるに誰が爲に軍するぞ。はや冑を脱ぎて降參し、命生きて故郷に歸れよや。とよばはり、攻めたりければ、朝比奈備中守をはじめ、丹下の砦を攻めんと、稻麻をみだしし如くなる大勢、大いに驚き騒ぎ、崩れ立ちて立上りみれば、いかにも大將の首と見えたり。あまりの不思議さに、何の思慮もなく散亂し、織田方の兵士に追ひつめられて討たるゝもの多く、太刀物具を棄てたることも少からず。

織田殿よきほどに人數を引上げ給ひて追はせ給はず。下方九郎左衛門尉といふ者、今川の同朋林阿彌を生捕りて、大將の陣へ連來りしかば、首數取りたるより遙かにましたる手柄なり」と悦び給ひ、討取りたる首どもを見せしに、假名實名を知りたるもの六十餘人、その外すべて二千五百餘級とぞ聞えたる。さてのちに、林阿彌はさまざまの引出物賜はりて、駿河國へ送られたり。

抑、今度木下藤吉郎が七ヶ處の砦を築き、今川の兵士を七ヶ處へ引分け、五ヶ處の砦は落ちて二ヶ處の砦を堅く守らしめ、今川の將士を驕らせ、旗本の兵までも引上げし故に、本陣無勢になり、かゝる始末に及びしなり。されば全く藤吉郎の軍略により、畢竟織田殿は打勝ち給ひしことにこそ。 (三編卷之二)

九 狂 歌

栗柯亭木端

大阪の人、もと眞宗の僧。安永二年歿。

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮らされもせず

頭光

ほとゝぎす自由自在にきく里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

朱樂菅江

霞さへ春さへけさはたつものを

餅はすわりの尻のおもたさ

頭光 江戸の狂歌師。寛政八年歿。年八十。

朱樂菅江 山崎景貫。江戸の人。寛政十年歿。年六十一。

馬場金埒

江戸の狂歌師。文化四年

雪ならば云々

雪ならばいくたび袖を拂はまし花の吹雪の志賀の山ごえ(古歌)

元本網

江戸の狂歌師。文化八年

花の時たば

鹿都部眞顔

江戸の狂歌師。文政十二年

四方赤良

太田覃。南畝又は蜀山人と號した。文政十二年

時鳥云々

時鳥なきつる

雪ならばいくら酒手をねだられん

花のふぶきの志賀のやまかご

花の時たばかられたる雲なれば

ゆだんはならず秋の夜の月

あらそはぬ風の柳のいとにこそ

勤忍ぶくろぬふべかりけり

時鳥なきつるあとにあきれたる

馬場金埒

元本網

鹿都部眞顔

四方赤良

かたを眺むればたゞありあけの月ぞのこれる(後徳大寺實定)

宿屋飯盛

石川雅望。江戸の人。文政十三年

後徳大寺のありあけの顔



蜀山人

世わたりの道にふたつの追分や

たからの山に借金をやま

宿屋飯盛

一〇 常山紀談

十五卷外に拾遺四卷附録雨夜燈あり。湯淺元禎の著作にかゝる。戰國時代より徳川氏の初に至る百餘年間の名将傑士の言行を輯録す。元文四年の自序あり。

湯淺元禎は常山と號す。備前岡山の藩士なり。官にありて方正、晩年直言を以て忌諱に觸れ、退隱す。これより著書を事として自ら樂めりといふ。天明元年四月歿す。年七十四。

一 太田持資歌道に志す事

太田左衛門大夫持資は上杉定正の長臣なり。鷹狩に出てて雨に逢ひ、或山家に入りて、簞を借らんといふに、わかき女の、何とも物をばいはずして、山吹の花一枝折りて出しければ、花を求むるにあらず。とて怒りて歸りしに、これを聞きし人の、それは、

太田左衛門大夫持資
難髪して道灌といふ。
上杉定正
鎌倉執事持朝の四子、扇ヶ谷六代の主。

七重八重の歌
兼明親王の
作。後拾遺集
に出てゐる。

廳南
上總國長生郡

七重八重花はさけども山ぶきの

みの一つだになきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし。といふ。持資おどろきて、それより歌に志をよせけり。

太田道灌と筆蹟



し、やがて歸りて、潮は干たり。といふ。「いかにして知りたるか」と問ふに、

遠くなりの歌
僧曉月の作。

「遠くなり近くなるみの濱千鳥
鳴く音に潮のみちひをぞ知る
とよめる歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ」といひけり。
又、いづれの時にや、軍をかへす時、これも夜の事なりしに、利根川を
渡らんとするに、闇さは闇し、浅瀬も知らず。持資また、

そこひなきの
歌

素性法師の
作。古今集に
出てゐる。

「そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波はたて
といふ歌あり、波音荒き處を渡せ」といひて、事なく渡しけり。(卷一)

二 鳥居強右衛門忠節の事

勝頼
武田信玄の
子。天正十年
織田信長に滅

天正三年、勝頼、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照
宮、援兵を織田家に請はせ給ひ、後卷の謀を廻らし給ふ處に、城中糧

された。
東照宮

徳川家康。

奥平九八郎信

昌

元今川氏に仕

へ後徳川氏に

屬した。

米既に盡きんとせしかば、この旨を告げ奉らんため、鳥居強右衛門
勝商に命じて、密かに城を出でしむ。鳥居のがれ出づることを得
ば、向うのかんぼうが嶺に煙をあぐべし。三日過ぎて、又かの山に
煙を兩度あげなば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷
ある事と知り給へ」と約して出づ。信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへ
て遣はす。五月十四日の夜、城の西なる山の岩根を傳ひ、川に入る。
寄手もとより大野川、瀧川の水底に繩を張りて、鳴子をかけたれば、
通るべき様もなし。二人水練の達者にて、川の浅瀬はよく知りつ、
小脇指をぬきて、川底を潛り、繩を切つて通りしかば、からくとな
りけるを、番の兵ども怪みけるに、その中に、一人、五月雨には、かゝる
川をば鱸うなぎの通るならん」といひければ、さて止みぬ。
二人は早瀧の下、廣瀬といふ處に上り、かんぼうが嶺にて煙を上げ、

穴山

名は梅雪。武田氏の臣。

逍遙軒信綱
信玄の弟。

十五日に岡崎に参つて、しかく、の由を申す處に、信長その日岡崎に着陣せらる。鳥居は、信昌なほ心もとなくや候らん。忍びて城に入ることを得ば、はや後卷候べきこと、審しらに申さん。とて引返す。鈴木は、信昌が父美作守貞能さかのみに告ぐべしと、鳥居に別れけり。鳥居かんほうが嶺に上り、相圖の煙三度あげて後、篠原といふ處にゆき、忍び入らんとするに、柵に重々砂をふりまきて出入の人の足跡を改めしかば、なか／＼入るべき様なくてためらひけるを、穴山の手の者に見咎められて、遂に搦められけり。勝頼、逍遙軒信綱を以て仔細を問はるゝに、鳥居、事の由をありのままに答へしかば、勝頼、鳥居を呼びて、汝が命をたすくべし。汝城際にゆきて、信長は、上方の軍にて、この城の後卷思ひもよらず。といはば、城兵降参すべし。さらば汝を厚く賞せん。といはれしかば、鳥居

岡崎

三河國。

野田

三河國。

作手
三河國。

前田玄以

名は宗向。秀吉の五奉行の一人。慶長七年歿。年六十四。

すなはち、心得候。とて、城門近くいたり、後卷とて、信長父子岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一の宮に陣せり。徳川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。この城、運を開かんこと、掌の中にあり。といひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて勝頼にかくと申せば、勝頼大いに怒つて、城に向けて礮にして殺しけり。長篠にて勝頼敗北して後、信長をはじめ、鳥居が無雙の忠を感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。(卷四)

三 豊臣關白五腰の刀の主を察せられし事

秀吉伏見にて、ある日廣間に出てられしに、五腰の刀を見て、試に其の名をいはんとてさゝれしに、違はざりければ、前田玄以まへだ誠まことに神智のおはし候よ。と驚きければ、秀吉笑つて、何の仔細もなきぞとよ。

秀家

浮田秀家。豊臣秀吉の臣、後徳川家康に仕へた。寛文二年歿。

景勝

上杉景勝。謙信の養嗣子。

利家

前田利家。

輝元

毛利輝元。元就の孫。寛永二年歿。年七十三。

江戸大納言

徳川家康。

秀家は美麗を好むが故に、黄金をちりばめたる刀是なるべし。景



豊 臣 太 閤

勝は父の時より長劍を好めり。寸の延びたる刀を是にあてたりき。利家は又左衛門といひし時より、先陣後殿の武功により今大國を領すれども、昔を忘れず。革卷きたる柄の刀、是他の主に非ずと思へり。輝元は異風を好む。異なる體に飾りなせる刀是ならん。江戸大納言は大勇にして、一劍を頼むの心なし。とりつくるひたる事もなく、又美麗もなき刀、其の志に叶ひたり。これを以て

察しけるに、違はざりけり。と言はれけり。(第九)

四 曾呂利新左衛門屢頓智の事

堺

和泉國。大阪の西南三里餘。

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤、汝の姓名は何と申すぞ。と問ひけるに、答ふるやう、臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申し候。太閤、さては奇なる姓もあるものかな。して其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもありつるものか。と問はせけるに、又答ふるやう、聊かいはれ之あり候。別にあらず、臣の拵へたる鞘堅くして、そろりと入り敢てつかへず。是を以て曾呂利と申し候。太閤、こは奇なり。又折節來らるべし。他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、汝の姓名は何とか申ししな。答へて曰く、曾呂利々々々、新左衛門々々々々。太閤怪みて其の重言を尋ねけるに、新左衛門

の答ふるやう、殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候なり。新左衛門或時太閤に向ひ、願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし。とありければ、太閤はいぶかしく思ひ、こやつ又何をかなすらんと疑ひしが、何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅がれよ。と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳根みみねに口寄せて何やら言ふ體なれば、皆々心中密かに驚き、かやつ何を言ふらん、もしや我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも亦測られず。と憂ひ、各、わが邸に歸りて早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集つどひければ、太閤の御前に出で、謝して言へるやう、殿下一日の御耳を拜借し、其

のからばしき匂を嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐する餘席之なく候。これ全く殿下御耳の功能なり。とありければ、太閤も亦呆然として驚きけりとなん。又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗るその功ありける程に、太閤の申しけるは、何なりと汝の望むものを取らせんとありけるに、新左衛門の言へるやう、臣敢て大いなる望も之なく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし。太閤、そはいとく、易き事なり。餘り寡欲の至ならずや。と仰ありけるに、新左衛門、これにて澤山なり。と申して退出なししが、やがて二つの紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、前日約定の米之に賜はりたし。とて米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれにはあきれ、しばし言葉もなかりけりとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水或は其の近邊に放ちて娛樂となしけるが、程經て見あきたりとして、近習の者に、何ぞ一用を言出づる者には之を與へんと申されけるにぞ、皆々大いに喜び、臣は之を紙押になさんと言ひ、或は臣は金の茶釜の蓋もなければ、せめては之を以て其の蓋の取手になさんと言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて、各一個づゝ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、臣は人類の角力も既に見あきしことなれば、此の蟹を集へて角力を致せんと存ずるなりと言ひければ、太閤、角力とありては、五個や十個にては其の興薄かるべし。悉く持行くべし。と、残れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。其の頓才實に驚くべし。(卷九補遺)

五 石田三成生捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政、石田を生捕にせられしが、いと懇に會釋して、數十萬の軍兵を率ゐられし事、智謀のゆゑしき事と申すべし。軍の勝敗は天の命に候へば、力に及びがたし。と禮義正しかりければ、三成打笑ひ、秀頼公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡きかくなりし事、何をか悔むべき。これは太閤より賜はりし脇差なり、かたみにまゐらすよ。とて與へけり。

田中、石田を引具して大津に參りければ、東照宮、本多正純に、石田を守護すべきよし仰せ出されけり。正純石田に向ひて、秀頼公年若く、事の是非をしろしめさじ。唯太平を致す道こそ有るべきに、よしなき軍起して、かく恥辱にも及ばれしぞかし。と云ひしに、三成、吾

田中兵部大輔
吉政
近江の人。

本多正純
正信の子。後
罪ありて出羽
に配せられた。

秀家
浮田氏。
景勝
上杉氏。

九郎判官
源義經。
衣川
陸中國。

土肥
伊豆國。

土民より起り、國を賜はりたる恩譬へんやうなし。世の様を見るに、徳川殿を打滅さずば、終に豊臣家のためよからじと思ひて、秀家景勝を始として同心なかりしを、しひて勸めて、遂に此の軍をば起したりき。戦に臨んで、二心ある輩裏切せし故、勝つべき軍に打負けぬるこそ口惜しけれ。二心ある人だになくば、汝達をはじめ、かくの如く搦めなんに、志を失ひたるよ。運盡きぬれば、九郎判官も衣川にて空しくなりたりき。吾が打負けしは天命なり。といふ。正純、智將は、人情を計り、時勢を知るところこそ申せ。諸將の同心せざるも知らず、輕々しうも軍を起されしものかな。軍敗れて自害もせて、からめられしは如何に。といふに、三成怒つて、汝は、武略は露も知らざりき。腹切つて、人手にかゝらじとするは葉武者の中よ。頼朝公、土肥の杉山にて、朽木の洞に身をひそめし心はよも知らじ。

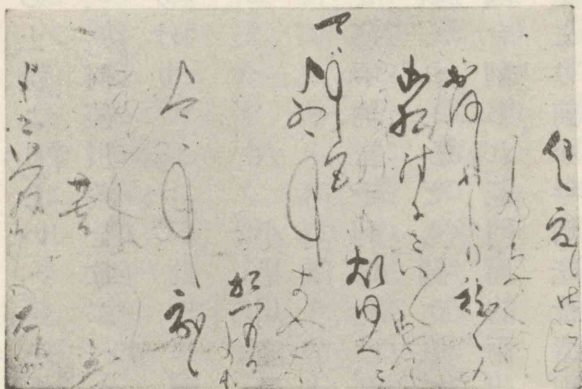
大庭
景親。

小西
行長。
安國寺
惠瓊。

宇土
肥後國。熊本
の南四里。

大庭おほはばにからめられなば、汝に嘲けらるべし。大將の道は、語るとも

汝が耳には入らじ。今はこれまでなり。とて、物もいはず。



石田を始め、小西、安國寺生捕られ、三人の肌あはだに木綿の破れたるものを着たるを、東照宮聞し召し、石田は日本の政務を取りたる者なり。小西も宇土の城主なり。安國寺またいやしむべき者にあらず。軍敗れて身の置處なき姿

となるも、大將の盛衰は古今に珍しからず。命をみだりに棄てざるは、將の心とするところ、和漢其の例多し。さらに恥辱にあらず。其のまゝ、京中をわたしなば、將たる

者に恥を與ふること、吾が恥なるべし」と仰有つて、三人に小袖を賜はりけり。石田に見すれば、「これは誰が與へたるぞ」と問ふ。「江戸の上様より」といへば、「それは誰が事ぞ」といふ。「徳川殿」と答ふれば、「三成、何徳川殿を尊ぶべき」とて、一言の禮に及ばず、あざ笑ひて居たりけり。(卷十五)

六 小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は、關ヶ原役の時、秀家と共に徳川家に弓箭を執られしかども、關ヶ原にみづから赴かざるの故に、安藝備後等の國を削られ、長門・周防兩州を賜はりけり。是より前、小早川隆景遺訓して輝元を諫められし中に、「毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたり」と謂ふべし。これより後、かりにも

國を貪る心あらば、忽ち滅ぶべきよ」と戒められしに、輝元、隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる、露も違はざりけり。

隆景は、武勇のみにあらず、智謀にすぐれたり。父元就、病重くなりて、其の子を集め、兄弟の數ほど箭を取寄せ、多くの矢を一つにして折りたらんには、細き物も折り難し。一筋づゝ分ちて折りたらんには、たやすく折るゝよ。兄弟心を同じくして相親しむべし」と遺言せられしに、隆景その時、争は欲より起り候。欲をやめて義を守らば、兄弟の不和候まじ」と言はれしかば、元就悦びて、「隆景の詞に従ふべし」と言はれきとぞ。

秀吉九州を討平げられてのち、筑前五十萬石を小早川に與へられしに、隆景、これは吾に過ぎたることなり。此の頃まで敵なりし身

に大國を興へらるゝは、吾を愛するにあらず、九州をなつけんため
の假の謀よ。」と思ひて、秀詮に國を譲り、備後の三原に引籠られきと
なり。(卷十六)

七 東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松におはしましし頃、ある夜本多正信御前にありしに、誰
人にてかありけん、懷より書を取り出し、諫め奉るべしとかねてより
存ずる事の候ひて書き候ものなり。」と申せば、大いによろこばせ給
ひ、それ讀め。」と仰ありければ、ひらきて讀みけるに、一條讀み終る度
毎にうなづかせ給ひ、尤なり。」と仰せられ、讀み終りければ、汝が志感
じ入りたり。これより後も心おきなく告げよ。返すも神妙
なり。」と繰返し仰せければ、かたじけなきよし申して退出す。正信

東照宮
徳川家康。
濱松
遠江國。
本多正信
家康の臣。

居残りて、「只今諫め申しし事用ふべき事に候はず。」と申す。東照宮
大いにけしきかはらせ給ひ、「いやとよ。己があやまちは知らずし



て過ぐるものなり。
國を領し人を治むる
身には、あやまちを告
げ知らせ諫むる者は
すくなく、たゞ諂ひて、
主君のいふ事道にた
がひても、「さは候はじ。」

と詞を返す人はなきぞかし。諫をふせぎし人の、國をうしなひ身
を亡ぼし、後世の笑草となりしたためし多し。只今われを諫めし者、
日頃心を盡くし、見及ぶ様につき諫めんと思ひて書きしるし、時も

あらば見せんと思ひ居たりし志、何にたとへんやうなし。其の用ふべきと用ふべからぬとにはよらざるなり。たゞ彼が忠心を愛するなり」とぞ仰せける。

又或夜の御物語に、凡そ主君を諫むる者の志、軍に先がけするよりも大いにまされり。其の故は、戦に臨みて一番に進み出づるは、もとより身をすてての事なれども、必ずしも討死せず。又討たれたりとて、後の世に名を残し、死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとぐれば、恩賞にて家富み子孫榮ゆるなり。されば得ありて失なき忠なり。諫は然らず。主君無道にて善をにくむに、すゝみ出でて直言すれば、十に九つは刑罰にあひ、妻子をほろぼし果つるやうにもなり行くぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし、諫言はいさゝかも身の爲をおもふ心あらば、いか

で主君の前にて直言すべき。たゞ人に君たるものの賞すべきは諫言なり」とぞ仰せありける。(卷十八)

八 福島正則茶道坊主が義氣に感ぜられし事



福島正則

福島正則常に物暴く、人を誅する事を好めりと、世の人はいひあへり。或時近習の士、少しの咎ありしを、城内の矢倉に押籠め、食物を與へず、餓死せしめんといはれしに、その士の恩を受けたりし茶道坊主、この有様をいたみ、密かに夜焼飯を携へゆきたり。かの士、我は罪ある故にかくなりたり。汝只今のふるまひを、殿聞し召されなば、我よりも罪

福島正則
尾張の人。秀吉の功臣。

重からん。又飯を喰ひたりとて命助かるべきにあらざれば、とく
歸れ」といひしに、茶道いひけるは、同じ罪に行はるとも後悔なし。
われ先に、既に殺さるべき事ありしに、君の救にて一度助かり候ひ
ぬ。恩を受けて報ぜざるは人にあらず。此方も亦弱げなる心お
はして、わが志を空しくし給ふ事こそ口惜しけれ」といへば、彼の士
悦んで、さらばとてこれを食す。夜毎にかくの如くしたりけり。
程經て、死したるならんとて、正則矢倉に行かれしに、顔色少しも衰
へず。正則、さては食を送りたる者あらんと怒られしに、茶道來り、
「某こそ送りたれ」と申す。正則はたと睨みて、おのれ何故にかくし
たるか、頭二つに切りわりなん」と膝立て直されし時、茶道少しも騒
がず、われ昔罪を得て、既に水責にあひて殺さるべかりしに、彼の人の
の申し開きたりし故、今日まで、思ひかけず命ながらへ候ひき。そ

の恩を報ぜん爲、毎夜忍びて、飯を運び候」といふ。正則怒れる眼に
涙を流し、汝が志感ずるに餘あり。人はかくこそあるべけれ。彼
の士をも許すべし」とて、そのまゝ、矢倉の戸を開きて、罪を宥め、茶道
をも深く賞せられけり。
されば、暴悪の人と世に稱すれども、かく義に感ずることの切なる
故に、士の思ひ慕ひて力を竭し、正則の爲に、身を捨てて奉公しける
も、げに故ある事にこそ。(卷二十)

九 塚原ト傳劍術鍛錬の事

塚原ト傳は常州塚原の人なり。父を新左衛門といへり。ト傳劍
術を飯篠長意に稽古し、伊勢の國司に仕へ、劍術を以て名を得、光源
院殿の師たり。其の後、上野の上泉伊勢守といふ劍術者あり、ト傳

常州塚原
常陸國眞壁郡
光源院殿
足利十三代將
軍義輝。
上泉伊勢守
新陰流の達人

また上泉にも學びたり。

ト傳が弟子の中に勝れたる者に一の太刀の極意を授くべしと人も思ひけるに、彼の弟子、或時道のほとりに繋ぎたる馬の後を通りけるに、彼の馬はねたりしに、ひらりと飛びのきて身にあてず。見し人、さすがに塚原の弟子の中にも勝れたるよと言ひしに違はず。と譽めてト傳に語りけるに、ト傳大いに驚きて、さては一の太刀授くべき器にあらざと、言ひけり。諸人此の事を不審し、試みよとて、類なきはね馬を道のかたへに繋ぎ、ト傳を招きて傍に隠れて見居たりしに、ト傳馬の後を除けて通りし故、馬はねんともせず。人々謀りしに違ひければ、後にかくと語り、さて彼の弟子の早業を譽め給はぬは如何と言ひければ、ト傳聞きて、さればとよ、馬のはぬるに飛びのきたるは、業の利きたるに似たれども、馬ははぬるものとい

ふ事を忘れて、うかと通りしはおこたりなり。飛びのきたるは仕合と云ふものなり。劍術も、時により下手にても仕合にて勝つことあるべし。それは勝ちたりとも上手とは謂ふべからず。只先を忘れず機をぬかぬを善しとするなり。一の太刀の位に及ばざること遙かなれば譽めざりきと答へきとぞ。(卷二十三)

一〇 小櫃與五右衛門會津神公を諷諫せし事

會津中將保科正之は、台徳院殿の第三男にておはせしが、殊に豪氣なり。

ある時、近習の人に向ひて、人々の楽しむ所を尋ねられしに、小櫃與五右衛門といへる者、臣が楽しむ事二つあり、其の一つは、家貧しくして奢といふ事をしらず、天より命ぜられし貧を楽しむ由を申す。

保科正之
會津藩の祖。
台徳院殿
二代將軍秀忠

其の一つを問はるゝに、これは憚る所の候。とて言はず。しひて問はれしかば、謹んで申しけるやう、大名に生れざるを天の冥加と存じ、楽しむ所なり。と答へければ、その仔細を問はるゝに、大名は、天性賢くおはし候うても、臣下これを馬鹿にとりなし候。祿少き身は、其の師や朋友あしき事を戒め諫め候。故に、其の身を省みて馬鹿にならず候へども、大名はさはなく候。臣たる者、とかく忤たがひては身の爲よからじと存じて、其の主のよき事あれば、山の如くにほめ申し、いろゝの悪しき習はしを付け候程に、いつとなく恣はしになりもて行き、それよりは一言の諫をも申し難く候。いかに聰明にても、學問なく、教と



保科正之

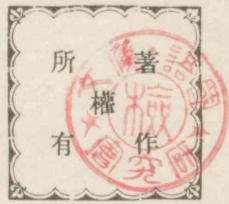
山崎嘉右衛門
蘭齋と號す。
京都の儒者。

いふ事をしらず、善事を辨へ給ふべきやうなき故、馬鹿になりはて候は、口惜しき事に候はずや。臣大名に生れざるを樂と存じ候は、此の仔細に候。と申せば、中將つくゝと聞し召して、よくもいひたるかな。尤も至極せり。今より馬鹿にならざる思慮すべきよ。とて、賞美のあまり、即ち二百石の祿をまし與へられけり。それより、山崎嘉右衛門を尊信し、學問を嗜まれ、後神公と諡おくりなせられしは、此の中將の御事なり。(卷二十四)

歴代文學讀本 卷一 終

翠升文學讀本 卷一 九錢
卷二 四錢
卷三 五錢
卷四 五錢
卷五 五錢

大正十一年十月廿五日發行
昭和四年九月廿三日再訂發行
昭和五年二月十五日訂正三版發行



歷代文學讀本
再訂版

編輯者 東京高等師範學校附屬中學校內
發行者 東京市神田區駿河臺三丁目一番地
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五
金四拾九錢	金五拾二錢	金五拾四錢	金五拾八錢	金五拾二錢



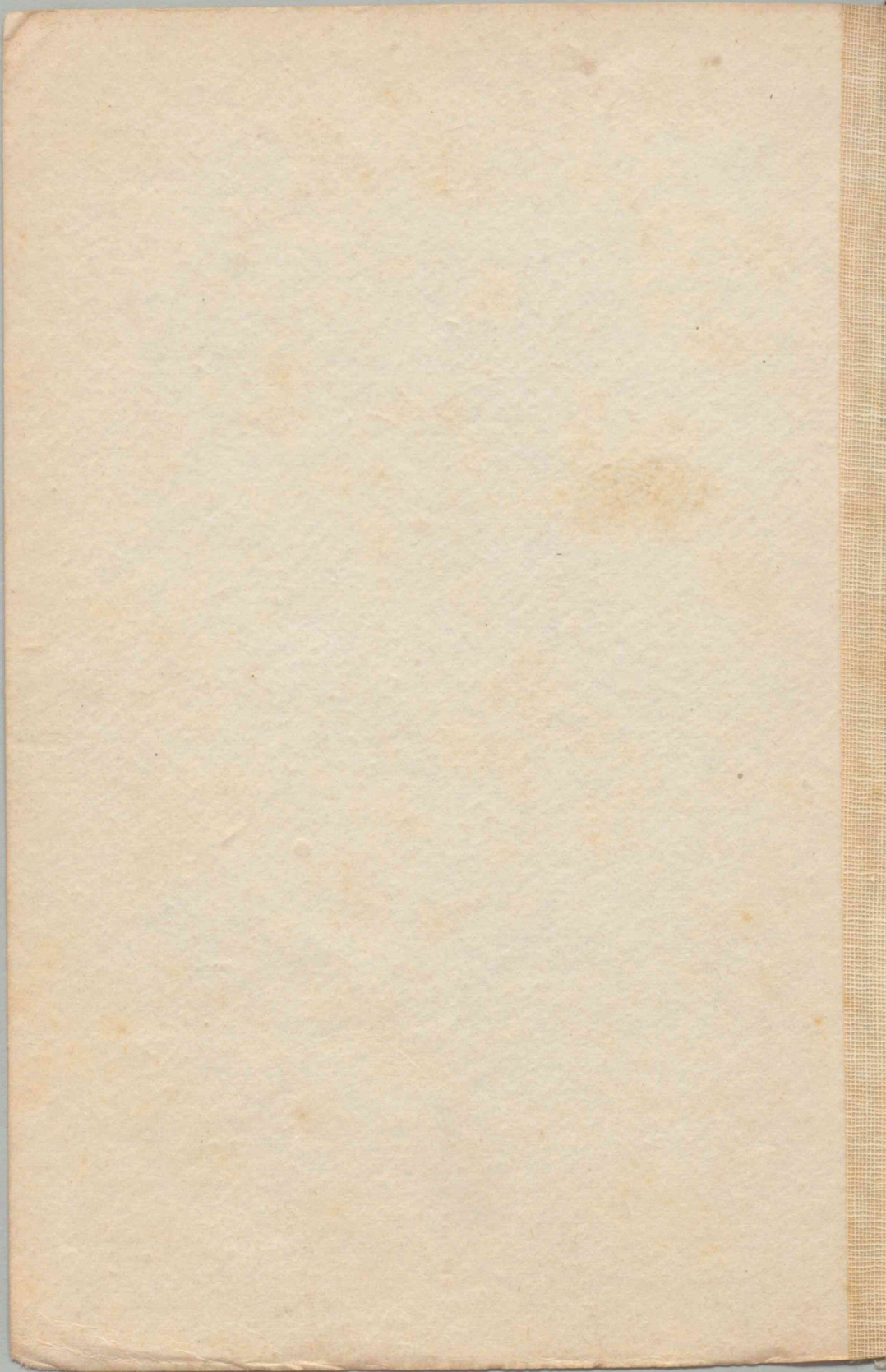
(英秀社會株式會社 印刷)


發行所

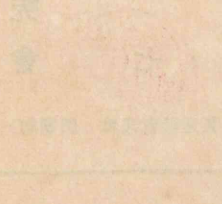
東京市神田區駿河臺三丁目
新潟縣長岡市表町四丁目(本店)
新潟市古町通七番町(支店)


目黒書店


電話新田一〇五八番
電話長岡一八番
電話新潟九〇三番
振替東京二八〇九番
振替東京三六一九番
振替長野四〇九〇番













一
栗
屋
表

文庫
0
930
9807

広島大学図書
2000079807
